



# 求道

第 六 卷  
第 八 號

求道

◎前念命終、後念即生

自督

◎郷里震災地より

講話

◎唯一の信

近角常観

聖傳

◎チャータカ釋尊傳

第二十九 鶉の喧嘩

第三十 舞孔雀

第三十一 魚と其妻

第三十二 聖なる鶉の話

◎不可思議の味ひ

告白

無漏田謙恭

◎十七憲法

第二條

近角常観

◎菅瀬師令夫人を弔す◎感謝

▲家庭と信仰

求道學舎

毎日曜午前九時

毎土曜午后二時

第二 求道會

毎月二十日午後七時

第三 求道會

〔九段坂佛教俱樂部〕  
〔日本橋蠣殻町説教所〕

求道講話久しく休講中の處九月十

八日土曜より従前の如く開會す

講 話

求道

第六卷 第八號

前念命終、後念即生

江州湖北及東濃大震災あり、幾千の人家一瞬に破壊し、幾百の同胞刹那に死傷す、何れも皆吾人が平素親近昵交あるの人、瞑目追想せば髮髻として音容眼前にあり、乾坤一震して悲鳴叫喚野外に滿ち、轟々として世界破壊せんとする當時を默想する毎に、火宅無常の世相歴々として現前す、是諸行無常、是生滅法の活教訓にあらずや。而して之に斃れたる我同胞は我等が爲に身を捨て、生滅々已寂滅爲樂の德音を示したまへる雪山の童子に非ずや。執持鈔に曰く

一切衆生のありさま、過去の業因まろくなり、また死の縁無量なり、やまひにをかされて死するものもあり、つるぎにあたりて死するものあり、水におぼれて死するものあり、火に焼て死するものあり、乃至寢死するものあり、酒狂して死するたぐひあり、これみな先世の業因なり、さら

且の妄心をおこさんばかは、いかてか凡夫のならひ、名號稱念の正念もおこり、往生淨土の願心もあらんや、平生のとき期するところの約束もしたがはば、往生ののぞみむなしかるべし、しかれば平生の一念によりて往生の得否はさだまれるものなり、平生の時不定のおもひに住せば、かなふべからず、平生の時善知識のことばのしたに、歸命の一念を發得せば、そのときをもて娑婆のをはり、臨終とおもふべし。

噫我同胞は身を犠牲にして先世の業因の遁れ難きを體現し、平生の時、一念歸命の下に前念命終、後念即生することゝ顯示せる善知識にあらずや。吾人若し今にして先世の業因、無常の人生を悟らざるば身を以て示したる我同胞の誠を空しくするものに非ずや。吾人若し今にして召喚の勅命を聞き、無明の醉夢醒覺せずんば、大聖沓哀の善巧を水泡に歸するものに非ずや。吾人他郷にありて大震災の報を聞きたる時は既に生別死別を覺悟したるに非ずや。又郷にありて僅かに身を以て遁れたるの人は、妻子珍寶及王位臨命終時不隨者を體得したるに非ずや。我も人も今にして平生業成の眞宗旨を服膺せずんば、何によりて生死解脱の津梁を得ん。愚禿鈔に曰く、

本願を信受するは前念命終なり、即得往生は後念即生なり、他力の金剛心也とまさを知るべし、便ち彌勤菩薩に同じと。嗚呼我等如來選擇の願心を聞信せる一念は正に是れ一旦命終したる也、娑婆の終也、臨終也。信樂開發せる一念は速に彼土に往生して唯身を人生に寓せる也、形骸を人間に残せる也、寧ろ一たび死して蘇生したる也。超世の悲願さしより、われらは生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねど、心は淨土にすみあそぶ。是れ正定聚の菩薩也、眞の佛子也。これ聖人が汝命根應十餘歳、命終速入清淨土の靈告を蒙りたまひてより正に十年、法然上人に遇ひて聞其名號、信心歡喜したまひし一念、前念命終、後念即生の大事を解決して善信善信眞菩薩の眞人生を實現したまひし恩澤に非ずや。正にこれ平生の時善知識のことばのしたに歸命の一念を發得せば、そのときをもて、娑婆のおほり、臨終とおもふべしとの聖訓の淵源也。吾人有縁の眞善知識の訓誨に曰く、夫れ人世のはかなきとは風前の燈、水上の泡の如し、ゆめゆめ油斷すべからず、かるがゆへに淨土眞宗の勸化は平生業成の信の一念にて往生の得否は定るものなり、是皆彌陀他力本願の強縁にもよらざることに心得べきなりと。是亡父が拳々服膺して終身感泣

拜讀したる所、吾人亦我家訓として日夕奉戴措く能はざるもの、而して今回の震災の如き、洵に之を事實に示されたる也。嘗て我家庭に薪水の勞を共にして禮容を學びたりし少婦は、二兒を遺して紅顏空しく萎み、我れ幼にして常に嬉戯往來せし家は忽にして摧けて泥土に委す。げに人生のはかなきことは風前の燈、水上の泡の如し、若し平生業成の宗旨あるにあらずんば、いかてか往生の素懷をとげん。歎異鈔に曰く、ただし業報かぎりあることなれば、いかなる不思議のこともあひ、また病惱苦痛せめて、正念に住せずしてはらん念佛まふすことがたし、そのあひだのつみをばいかがして滅すべきや。つみさえざれば往生はかなふべからざるか、攝取不捨の願をたのみたてまつらは、いかなる不思議ありて、罪業をかかし、念佛まうさずしておはるともすみやかに往生をとくべしと。嗚呼攝取不捨の誓願あらずんば、諸行無常の人生、猶如火宅の世界、何ぞ永劫の得脱を期せん。嗚呼平生業成の宗旨、信の一念に於て前念命終後念即生の大事を成辨して臨終の善惡にかゝらず大船涅槃を超證すること、畢竟願力自然の不可思議の強縁に率かるれば也。吾人は此に於て感泣鑽仰言ふ所を知らざる也。南無阿彌陀佛々々々々々々。

自 督

郷里震災地より

今回の大震災は何共申様なき未曾有の出来事、煩惱具足の凡夫、火宅無事の世界はみなもてそらごとたはこと、まことあることなきに、ただ念佛のみぞまことにておはしますとこそ仰せは候ひしが、南無阿彌陀佛こそ金剛不壞、長生不死、人も家も天も地も皆是虚假の世間にて候事今こそ明らかに知られたり。不肖耶馬溪巡回中郷里に此出来事ありしことを知らず、行く／＼傳道して竟に十六日晚に至るまで露知らざりしこと、幸か不幸か、何れにいたせ凡夫のはかなき憐れなるものに候。十二日に高瀬自在九家に参り、一家全村中心よりの厚遇を更け、晝夜大悲の御恵に浴しつゝ、翌十三日常に同行したまひし有田様の外に同朋三人と共に、心地よき朝の空気を呼吸して、山水碧なる耶馬溪の道中にかゝり申候。

鶴居の神社を過ぐる頃水門の人柱となりし古の忠義なる女の話をかき、風こそよく、さの穂をながめつゝ、いつになき

詩情を惹起しつゝ、山水の奇を賞し、山陽の激賞せし擲筆峰を眼前にながめたる寺にて講話を致し、翌十四日は新耶馬溪の危峰聳え、怪岩飛ばんとする間を乗合馬車にて五人、法を喜び景を賞しつゝ行き候。危きも／＼壘を重ねたる様な、華束をもりたる様な、板をたてた様な種々様々なる岩山を見たる時、此様な處に地震がありたらばいかに危からんと考へ、又溪流に磊々落落として幾十圍の大岩石の重なる様を見て、幾百千年の昔はたしかに此山がくだけたるものなるべしと、當事無言の中に昔の事を想像せしは何ぞしらん、數時間の後に我故郷に其事實を實現すべき世界の有様なりとは。當時不肖の胸中に描出されたるは前世界の事ならて、現在郷里の新出来事ならんとは。午後一時過玖珠郡森町に着し、早々食事をもせて三時頃講話に出て、當日東西兩派眞宗寺院の催せる戦役死病軍人追悼會の爲に、諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂の偈文を説きし時は、正に是れ東淺井郡虎姫村五村別院郡役所を中心として、郷里知人有縁の有情非情、諸行無常の大事實を現出せんとは。是生滅法を呼びたる時は嗚呼我が親しめる人々の斷腸絶命の時ならんとは。南無阿彌陀佛／＼。郡内三十

ぬるを、わがよたれぞ常ならむとの大訓戒を日本全國の人々へ、否々私一人に知らしめたまはん爲なりしか。戦死軍人の功を認めずんば其死を犬死せしむるものにあらずや、無常の事實を示されて其善巧方便の思召に氣附かずんば、信仰上其死を犬死せしむるものにあらずやと話せし時は、正に我同胞の實に其無常を我に示す時たりしか。説く者は説かるるものなり、戦死者の意義を説くは正に震死者の深き意味を説くなりけり。而して是れ畢竟我等衆生に生滅滅已寂滅爲樂の大德音を與へたまはんが爲にあらずや。有爲の奥山今日越えて、あささゆめみしゑひもせず、眞如法性の月、盡十方無碍光の一つを仰ぐと説くときは、既に御同胞は正に寂靜無爲の都に覺めたるの時なり、無明の醉の醒めたるの時なり。歸去來、魔郷不可停、曠劫來流轉、六道盡皆經、到處無餘樂、唯聞愁嘆聲、畢此生平後、入彼涅槃城、我同胞の涅槃に入れる時は、我は猶有爲の奥山に迷惑して郷里に愁嘆の聲を聞く時なりけり。嗚呼南無阿彌陀佛。

翌十五日は勿論猶少しも知らずして、御同朋三人と別れ、有田兄と二人乗合馬車に、共に多生有縁の御引合せを感謝しつつ、日田に着し候。一昨年久留米に行きし時、崇谷四柱君の

激しき無常を郷里に示されつつ、猶少しも自覺せざりしとは。嗚呼、嗚呼。

かくて十五日もしらずして、十六日は車にて吉井まで筑後川に沿て下り、久しく待ちたまはりたる橋詰又三郎氏の宅に入り、實に宅門、屋門の有様にて此上もなく安樂に種々の法味樂を受け、二日前より此地に傳道したまへる水月法兄に遇ひ、共に講話することとなり、かつて福岡にてわかれたりしが再び此地に邂逅して喜び、晝は不肖も實験懺悔を話し、水月兄も懺悔告白をなし、夜に入りて不肖講話すべく會場に至り、御同朋の一人申さるる様、本日新聞にて實に悲惨なる大地震の事ありしが、實に人世は無常であることを知らして貰ひましたと。何處に地震がありました。江州が大地震であります。江州はいづくてありますか。犬上郡とありました。ともかく其新聞を見せていただきますしようと、乃ち新聞をさがさる。

其間の待遠きこと一分實に一時間の思あり。直に披き見ればこはいかに。東淺井郡中心にして、しかも郡役所全壊、死傷澤山、家屋破壊無數なりと、實に茫然として自失したる如し。

忽爾として以爲く、聖徳太子の宣へる、世間虚假、唯佛是

病床につき、釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらが無上の信心を、發起せしめたまひけりの和讃を説き、種々とあれば人世我等は種々の善巧方便を蒙るなり、病も深き御思召あるありて、唯無上の信心を知らしめたまふ善巧なりしかと、御話せし時、一念開發したまひしが、次上の兄氏に日田に遇て、同君爾後大法悦の中に辭世をよみ、「夕立の晴れて隈なき月夜かな」とよみたまひしをさし時は、我同胞も亦煩惱の黒雲はやくはれ、法性の覺月すみやかにあらはれて、盡十方無碍の光明に一味にして、かくなにしらず有爲の奥山に迷へる我を憐みたまへる時なりしか。

十六日朝、丸茂様の病を見舞はんとて筆をとりし時の所感に曰く。今年巡回の先々には激しき無常を示さるるばかりなり、昨年遇へる夫人の逝去したまへる事あり、二週間前に一人子の逝去さるるあり、甚しきは予の宿せんとする家の娘年十八歳なるが心臓麻痺にて頓死せるあり、之を眼前にみたるときは我乍ら今迄生きて居れるを不思議におぼゆるなり、たとひ今夜死すとも苦情は言はれぬ様な心地するなり、なごりあしく思へども娑婆の縁つきて、力なくしておはるとき彼土へは參るなりとかきたる時は、何ぞ知らん、猶々偉大なる

眞とはげに此事なりけり。嗚呼我江州は渾沌として冥々晦々たり。乃ち電報を發して曰く、佛、母、家、無事歟、返事待つと。而して同時に東京にも震災の事聞合せたるなり。而して直に満堂の聴衆に對して、亦涅槃經四句の偈を説く。當時の胸中は實に郷里に向て一點の希望なし、實に雪山童子の捨身求法の實況なり、眞個に諸行無常なり、豈如來大悲の光明なくして一刻も生くべけんや、唯輝くは盡十方無碍の光なりけり。演説終りて亦新聞紙を見る、慘狀の報道頻々として酸鼻に堪へず。乃ち決心して以爲らく、モハヤ返事を待つて出立すべきにあらずと。乃ち即決急断して出立す。時正に夜十二時。久留米の急行車は二時二十分なり、而して道程七里殊に橋詰氏の盡力により二人曳にて走る韋駄天の如く、車上忽ちにして凄涼として郷思胸に湧き、忽にして安詳として慈恩身に溢る。時として心中閉塞して憂心忡々なり、忽にして昏（かきてこゝにいたる亦一大震）々として眠らんとす。南無阿彌陀佛、我身ながらも分らぬ心なりけり。久留米に至れば時間を過ぐる事十五分、憾言ふべからず。以爲らく是れ久留米の御同朋に法縁したまへるなるべしと。高崎氏を訪ひ十八日朝勤行後、久留米教務所に二席の講話を爲す。善巧方便を説

きて感謝極りなし。午前十時二分多数の御同朋に送られて出發す。

久留米に於ける汽車に後れし爲、江州の御同朋、村瀬嘉兵衛氏より震災熄まず、寺無事との電報を得、又東京より母無事、損害少し、親類も無事との返信を得たり。如來の善巧不可思議也。

回顧すれば九州傳道を豫定の如く終りて、最後に筑後八女郡木屋村の木屋久鷹師を訪ふべき最後の一日だけ遂に約を履むあたはずなりぬ。師の寺は蕨姑射石門先生の住したまひし所にして、先代貫之師は吾人が業を授かりし師。久鷹師は一昨年予が久留米にゆきし時法縁深くして相遇ひ、本年も最初より待受けたまふこと切にして、福岡まで態々來られて十八日の再會を約せし所、而して今や忽爾として此境遇にあり、師の厚意と待受に對しては陳謝言ふ所を知らず、されど是れ前因の然らしむる所か、冀くは今日機縁の未だ來らざるは或は他日の縁熟するを待つて大に相喜ばしむるが爲なるなからんや。又大内龍男君の家亦同じく路より分岐する所、昨年一たび家兄暢三氏の迎を受けて、同君母公及兄弟の爲に夜中法話を爲して曉に出立せしが、今亦龍男君立寄を請はるゝこと

み。後法證して善巧院釋尼淨信といふ。

翌朝神戸に着す。福岡母公達吉君正吉君忠僕米吉君に至るまで喜び迎へらる。一年間の久瀾、相見て悦樂たどへかたなし。請に任せて六字尊號を揮毫し、立談半時法縁を説く。時至りて東に向ふ。琵琶の水舊に依りて漫々たり、而して吾故郷の知人朋友今如何なる状ぞや。

米原に着す。驛内靜謐少しも震災地の感なし。二時間發車を待つこと實に千秋の思あり。時至りて汽車虎姫驛に近づく。堤坊の上、桑畑の間、蚊帳を掛け、提燈をつり、人心洶々として人皆堵に安んぜず。忽にして人家一面盡く懷倒して慘狀見るに忍びず。虎姫驛に着すれば驛を初め、驛前の家屋一面崩潰したる状、面を舉げて見るべからず。母上と従弟尙友、ブラットホームに待ちたまへり。相見へて感泣言ふ所を知らず、茫として自失すること初めて其報を得たる時の如し。乃ち驛を出づ。田村五村道傍の家屋の倒壊の状何とも言ふ所を知らず。殊に五村別院に入れば本堂は辛ふじて其形を存するも、他は大廣間庫裡書院一面破壊の状形容し得べきにあらざ。土崩瓦潰などいふ文字などは其百分の一をもあらはし得べきにあらざ。門外の空地には天幕をはりて郡役所を假設し、

極めて切なり。然れども既に時間なかりしが上に此出來事あり。他日の縁を待つ。幸に昨日已來吉井に相遇ひし水月哲英兄

に請ふて久留米に午後講話を依頼し、猶木屋村にゆかんとを請ふ。生憎福岡に於て僧侶講習會に出講の約あり、如何ともするあたはず。問題未決にして出發す。佛天必ずまきに導きたまふ、果せる哉、汽車門司に着して正に馬關に渡らんとす、求道學舍來聽の御同朋と相會す、曰く石川成章師明朝まで講話ありと。乃ち午後水月君に代りて福岡に講話せんことを請ひ、水月兄に托電して予に代りて木屋に講せんことを請ふ。此に於てや木屋の法縁を空しうせざるを得、九州の傳道幸に其終を全くするを得たり。唯歸心矢の如く汽車の馳する猶遲きを憾む、夢魂飛びて伊吹山の畔に在り。汽車宮島を過ぐる頃、沓として夢寐の間に在り。人あり予を起すを見れば親友荻野兄なりけり。兩人相顧みて暫くの間言なし。兄曰く、予家族を帥めて旅に上り、數日前宮島に在り、嬰兒信子少しく病あり、妻之を抱きて郷里萩に歸寧せんとする途、船中にして病革まりて遂に逝く、兄に請ふて法名を得んと欲して手紙を東京に出したりと。予は事のあまりに不意なるに驚きて言の出づる所を知らず。稱名念佛唯佛天の善巧を仰ぐの

赤十字病院等假設せられ、負傷者陸續運ばれて治療を受く。

嗚呼これ我幼にして常に嬉戯したり所、懷舊の情胸に湧く。我が姻戚大井西雲寺に至れば、門は屋根飛びて柱のみを存し、庫裡傾きて壁落ち戸破る。家族迎へて慘として泣く。幸に無事なる本堂に詣し、佛前に禮し、慰藉安撫、佛天の加護を感謝し、先づ大寺村正福寺を見舞ふ。本堂庫裡一面皆破壊す。住職笹原稱君は我求道の御同朋喜び迎へて其中に立ちて大悲の善巧を感謝して止まず。不可思議なる哉本堂倒るゝも本尊宮殿と共に立ちたまひて少しも破損なく五尊皆無事。自分及家族梯子の下に支へられて亦無事、偏に御加護也と。前家後屋皆壓死者あり、蓋し虎姫村中の最慘なるもの、共に感謝して田村に出て、塚原君を訪ふ。亦本堂傾き損害甚し。老父母病あり、慰藉して曾根村に出づ。是れ細井君の村、其婦人は即ち我家庭に衣食を共にしたる雪子なりけり。當時彼女十八歳の頃、今や既に三歳の子と嬰兒とあり。細井君曰く、時正に盆會用意成り、彼女佛供米を洗ひつゝあり、家一たび飛び上ると思ふや既に倒れ、彼女一人壓死せり、是衆の爲に代れるものならむか、子兒母を求む見るにたへずと。寺の婦人として佛米を洗ふて死す、是法の爲に死せる也。南無阿彌陀

佛。南無阿彌陀佛。路にして御同朋藤澤萬九郎氏を訪ふ。亦家屋壊る。其中より出て謝して曰く、嗚呼此の如き時こそます／＼難有いと。夜歸家、つゝしみて父の墓に詣し、佛前に詣て感謝言ふ所を知らず。母上既に歸りたまふ。唯廊下の少しく壊るある耳。佛天の御恵み護持養育を謝し奉る。

南無阿彌陀佛。

事多く教へなし、品勝れさまに思ひ深かみて、信心にさま／＼の色を付ける人なり。

其色どるやうは、慈悲、柔和、閑靜、正直、多言、無言、歡喜、善事等也。所謂、心しとやかに自ら持ち、閑かにあぢきなげにもものうち云ひて、萬事正直にして而も慈悲あるを信心なりと覺えて、さなき人なば心得難く思へり。

又は、かたことまじりの法語、詞多きに語りまじはるを法義者と思ひ、

又は、しほたれてものをも言はず、思ひ有りげに見ゆるを深き信者と云ひ、

或は功德善事をすき好み、慶喜感歎の姿あるをのみ、眞しき信者也と思ひあへり。

是等は皆それなりの機々の色あるを、曠て信の姿と思ふは、信心と云ふものを知らざりける故也。

信とは佛力に歸して往生を疑はざるなり。

〔惠空語錄〕

講話

唯一の信

〔第二求道會講話〕

近角常觀

先日來夏期傳道に出かけて、一旦會津より歸り、再び尾州名古屋の講習會から美濃高須の講習會に出席致し、尙ほ二三有縁の地で話し、殊に昨日は先日來度々お話する故西川君の令兄の監理せらるる名古屋の日本銀行支店で一場の講話を致し、今朝八時新橋に着して直に上野不忍池の佛教青年會に参り、夫を濟して只今此方へ参つた譯であります。

斯の如き具合で先日來諸方で今年は唯信といふ事に就きて話して参りました。今日も又改めて『唯一の信』といふ題でお話する積りであります。信仰の極肝要は何處にあるかといふに、唯一の信。即ち佛の恵みを頂く一つ、絶對佛陀の恵みばかりで安心させて貰ふ、之であります。て信仰上の味ひから申せば、此の『信』の字の上に『唯』の一字があるのが實に有難いので、我々人生上眞に頼りになるは唯此の佛の恵みばかり、此の外には何も無いのである。其の恵みばかりといふ字が『唯』の一字であります。

先達來度々『唯信鈔』に就きて話して参つたのでありますが、親鸞聖人は『唯信鈔文意』に於きて、如何にお示し下されであるかといふに、

唯はたゞこのひとつといふ、ふたつならぶことをきらふことばなり。また唯はひとりといふことろなり。

とあつて、『唯』は二つ並べぬといふ文字である、たゞ一つといふ言葉である。唯信仰の一つと云ふ時は、信仰以外に何物も無い、二つ並ぶ物は無いのである。唯佛を信ずる信仰の一つである。又佛の方より言つても『唯』はひとりといふことろなり。唯一佛陀を信ずるより外に無い。之を要するに『唯』の一字なれども、我々の頂く所は此の一字に盡くるのである。我々の頂く所は佛のお慈悲ばかり、我々の眞の力となり給ふは佛の恵みばかり、其の佛の恵みを我々は信ずるばかり、何の方面より言つても『唯』の一字であります。

其の『唯』の文字を辿りてお話する時は、『唯信』の文字は先づ善導大師のお言葉に、

深く信ずる者仰ぎ願くば、一切行者等一心に唯佛語を信じて身命を願みず云云。

の御文があります。唯佛語を信じて其の他のものを當てにするのは無い。佛が我が助くるぞと言つて下さる其の御言葉夫れ一つを信ずるばかりであると言ふのである。猶ほ之を廣く考へると、同じく善導大師の御文に、

九十五種皆世を汗す、唯佛の一道のみ獨り清閑なり。といふ御言葉があります。九十五種といふは所謂九十五種の外道の事で、佛教已外の種々の教えてある。佛教已外に種々

の教えは數あれども、眞に世を救ふ教えとしては一も無い。皆な悉く是れ世を汗すものである。唯佛の一道のみ獨り清閑なり。て、此の人生にありて眞にすゞやかに、眞に閑かなる教えといへば唯獨り佛の一道あるのみである。何れの教えも皆な我々の心を汗すばかりであるが、唯獨り佛の一道のみが清閑であると言はれたのである。茲に一言申して置く事は、無論此の唯佛一道の中には廣く言へば佛教全體が皆籠るのであります。善導大師のお意は南無阿彌陀佛の外には無いのであります。毎に申す事ではありますが、佛教全體と言ふもの、其根源に逆上れば、結局南無佛、南無法、南無僧の三寶歸命の外には無い。而して此の三寶歸命も極まる所南無佛の一つである。即ち南無阿彌陀佛の一道となるのであります。て佛の一道と言ふ時は大層廣いやうに思へるが、其佛の教えは澤山あるのでは無い、結局無碍の一道のあるばかりである。人生に有りとする教え、有りとする法門、其數實に無數であるが、眞の教えは南無阿彌陀佛の唯一つ、此の一つのみ眞に清らかに眞に閑かなる一道である。故に佛教の上より言ふ時は、我々が斯く寄りあつて互に話し、稱名念佛して喜ばせて貰ふ。此の喜びの外に眞實清閑の一道は無いのであります。

又親鸞聖人は『和讃』に宣はく、

九十五種世を汗がす、唯佛一道きよくます、菩提に出到してのみぞ、火宅の利益は自然なる。

今の善導大師の御文によりて同じ御意を言はれたのであります。世の中に九十五種の教法は種々にあるけれども、是等は皆な世を穢がすばかりである。唯佛の一道のみ獨り清閑である。淨土の大菩提心に到りてのみ、三界無安猶如火宅の人生に於て、初めて廣大稀有なる佛の神力が自然に到り届いて下さる。實に有難き和讃であります。此等の場合に於て「唯」と言はれたのは、即ち佛教と、佛教以外の凡ての外道に對して「唯」と區別せられたのである。其「唯」は南無阿彌陀佛の二法であります。

次に先日來私は此の「唯」の字の使はれ方を段々味はせて貰つて見るに實に有難い。道禪禪師は佛教を聖道門、淨土門の二つに分けさせられた。一に聖道門といふは大聖釋尊の通られた道を辿りて、衆生の方より佛に向ひて進む道である。即ち自力の道である。二に淨土門とは、即ち佛より我々を救つて下さる道である。聖道門にすれば此の世で此の我々が佛に成るのであるが、淨土門にすると彼の佛が此の我々を彼の土に生れさせて下さるのである。此の二門を分けさせられて如何に仰せられてあるかといふに、

聖道の一種は今の時に證し難し、一には大聖を去ること遙遠なるに由る。……

大聖釋尊在世の時ならば親しく其の手引きを受けて聖道の道を迎る事も出来るが、今は大聖を去る事遙遠にして夫も出来ぬ。

……二には理深かく解微なるに由る……

聖道の教行は理致高尚にして、劣機下根の今日では逆も之を

理解する事が出来ぬ。

……是の故に大集月藏經に云はく、我が末法の時の中。億々の衆生行を起し道を修せども、未だ一人も得る者あらずと。當今は末法、現に是れ五濁惡世なり。唯淨土の二門のみ有つて通入す可き路なり。云云。

成程聖道淨土の二門は有つても、一方の聖道の門戸は末法五濁の今日に於ては通る事が出来ぬ。億々の衆生種々に行を起し道を修むるけれども、今日に於ては通る者は一人も無いのである。即ち門は二つ有つても一方は既に閉ぢられて仕舞うて居るのである。今此の家に這入るに二つの入口が有るにしても、一方の口が閉られて仕舞つてある時には、他に入口は幾つも無い、唯一つである。故に「唯淨土の一門のみ有つて通入すべき路なり」である。茲に「唯」の字が活きるのであります。どちらからでも這入れると思つて居る間は「唯」では無い、二つ有つても通れるのは一門である。此の淨土の一門で無ければ我々は行けぬのである。すると佛の教え種々ありと雖も、我々の通れるのは唯淨土の一門のみとなるのであります。初めに申した「唯佛一道獨り清閑なり」といふのも同じ味はひである。初めのは外道に對して唯南無阿彌陀佛の一つと言はれたので、之は聖道淨土自力他力と別けて、唯南無阿彌陀佛の二法と仰せられたのであります。

次は源信和尚の御言葉に、  
極重の惡人他の方便無し、唯彌陀を稱してのみ、極樂に生ずることを得。

之は見方によりては、念佛を稱へ諸の善を修して往生を願ふ

といふ所謂諸行往生の意味に成り得るのである。又他の行は一切用ゐずに唯南無阿彌陀佛の一法であるといふ意味も存するのである。つまり諸行往生念佛往生の二つの意味合ひが有るのであります。之を今日で言ふ時は所謂修養によつて行かうといふのが諸行往生である。出来るならば一寸でも善き事を爲る方が善い、同じくば一尺でも善き行ひを仕て行き度いと、念佛諸共に修養の道を考へる。一旦佛のお恵みを頂いてからは、善き事をするに差支は無いと、孝養父母奉事師長、何んでも善い事を仕て行かうのが諸行往生である。然るに佛の本願にはそんな事は少しも仰せられて無い。何んであるか。我々は本來善い事の出来ぬ者である。善いことの出来ると思つて居るのは、まだ自分の力を知らぬからである。然るに佛の本願には佛かねて此事を知し召して善事を行じて念佛せよとは仰せられて無い。戒を持ちて南無阿彌陀佛を稱へよとは仰せられて無い。唯念佛の一つを以つて救ふとあるは何であるかといふに、即ち今の源信和尚の御文に「極重の惡人他の方便無し、唯彌陀を稱してのみ極樂に生ずることを得」である。我々は善と言つては一善も爲る事は出来ぬのである。戒と言つては一行も持つ事が出来ぬのである。無學鈍根にして理智高遠の教えは逆も解からぬ。人に物を施す事すら出来ぬのである。自力聖道の教えては逆も救はれる道は無いのである。實に極重の惡人他の方便無き者である。然るに「唯彌陀を稱してのみ極樂に生ずることを得」て、茲に彌陀の本願念佛の一法がある。我々の助る道は唯此の南無阿彌陀佛の一道のあるばかり、此の本願南無阿彌陀佛を喜ぶ一つで極樂に往生

させて貰へるのである、といふのが此の御文のお意であります。我々は何一つ善き事は爲る事が出来ぬ、唯南無阿彌陀佛の恵みばかりが神力であるといふのであります。

私は今度美濃の高須へ參つて來ました。高須へは此の春も參り、又今度參りましたので、皆の人が非常に信仰を起しお慈悲を喜んで下さる。話が色々になります。私が高須へ參るやうになつた動機は何かと言ふに、近年亡くなられた方で播州に後藤祐護師とて非常な念佛者がお出になつた。其方の存命中に私は非常な辱知を得ましたので、此の方は白に六萬邊も念佛を稱へて居られたのであるが、其方が御往生前に非常にお喜びなされたのが今の御文の「御和讃」であります。

極惡深重の衆生は、他の方便さらになし、

ひとへに彌陀を稱してぞ、淨土にむまるとのべたまふ。

此の御文の御文を平素後藤師の御教化を非常に喜んで居られた或人に頼まれて書いた事がある。夫を美濃の或人が見て歸へられたのが御縁で參る事になつたのであります。此處で今度は五日間「歎異鈔」を話して參つたのであるが、其講義中に私が多年の宿題たる非常に有難き事を知らせて貰つた。其は明日求道學舎で話す積りでありましたが、其の外今度は「歎異鈔」全體に就きて得る處が非常に多かつた。斯くして五日間の開午前午後共に近來に無き満足を以て話させて貰つたのであります。其の高須に參るやうになつたのが今申す如く「極重惡人無他方便唯稱彌陀得生極樂」の御文の御手引きてある。嘗て後一條天皇の時諸山に勅して最も簡潔にして十方衆生悉く成佛すべき出離の要文を申出せと有つた時、諸山期せ

ずして此の御文を申し出たといふ話で有る。如何に其の當時に於て此の御文が一般に喜ばれたかが解るのであります。之が法然上人に至りて選擇本願念佛として最も著しく顯はれて、如何なる罪惡の者をも佛は必ず救つて下さる。如何なる五逆十惡の者も南無阿彌陀佛と彌陀の名號を稱する一つて佛の本願のお救ひに預るといふ事になつたのである。茲になる唯佛一道獨り清閑といふも、唯淨土一門可通入路といふも、唯稱彌陀得生極樂といふも、結局目指す所は南無阿彌陀佛の外に無いのであります。

法然上人の選擇本願念佛の御教化は、佛の廣大なる慈悲は我々に向つて與へて下された念佛の外に無い、佛が我々の機根を知し召して、我々に向つて與へて下された本願の恵みは、唯南無阿彌陀佛の一法であるといふのであります。私に此の度高須に參り、名古屋に參りても、何時も私の話の骨目は此の選擇本願念佛の外には無いのである。佛の本願は此の我々を救はんといふ御親心の塊である。其の親心は我々如き戒を持つ事の出来ぬ者、惡心の止まぬ者、人を疑ひ憎む者、其者を助くるには戒でも可かぬ、修行でも可かぬ、唯選擇本願南無阿彌陀佛の恵み一つて助くるとの御親心である。即ち我々亂暴者の爲めに眞の親心から南無阿彌陀佛といふ最も適當したる一枚の着物を選び與へて下されたのである。其の着物は佛が之を我々に與へる爲めに永劫の間種々に苦勞して下された親の御苦勞の塊である。私が今度高須に參つてた間に、最も多くの人々が安心して下された所は何處であるかといふに、親鸞聖人の『行巻』に

即是其行と言ふは選擇本願是なり。

といふ御文であります。一寸聞くと南無阿彌陀佛の一行が選擇本願であるといふのは少し妙に思へるが、南無阿彌陀佛の着物は親の苦勞の塊である。着物が親心から出来上つたのては無い、着物を造る事夫れ自身が親心である。佛の本願の親心は南無阿彌陀佛といふ一聲の念佛を離れて頂く事は出来ぬ。我々が此の廣大のお慈悲と承はつて南無阿彌陀佛々々と稱へる事は、即ち佛が我々に着せて下さる着物を頂くのである。我々が此のお慈悲を頂いて南無阿彌陀佛々々と喜ぶ時は、即ち其の親心の塊を頂いて居るのであります。

先日尾州の講習會の備ふされたお寺の主人が非常にお慈悲を喜ばれる方で、南無阿彌陀佛々々と念佛の聲の絶え間が無い。其の聲を聞くと、聞く者の心に偉大なる感化を與へられる。私は唯事ならず思ひて私かに有難く思つて居たのでありましたが、果して其方の經歷を聞くと、已前には非常に苦悶せられた事が有つて、一時は其の寺に縁の絶えたる事も有つたさうである。夫が或人の手引きて南無阿彌陀佛を喜ばれるようになり、殊に伊勢の村田師の勧めにより非常に喜ばれて、何より好きで有つた酒が、飲まぬのでは無い、一邊に飲む事か出来ぬやうになつたと話された。其の方の企か元で久しく御縁の無つた名古屋へも參る事が出来た次第であります。大分話か色々になりましたか。要するに何れにしても頂き所は恵みの一つである。此のお恵み一つが我々の生命であります。

以上は「唯」の字に就き古來信仰上種々に用ゐられてある味

はひを申したのであります。去りながら之を今我々か頂くとなると、何れより頂くも佛の御親心、選擇本願念佛の御恵み、佛のお力、佛の御まこと、唯此のお慈悲ばかりと頂く一つてあります。之を『唯信鈔』で申すならば、先日來度々お話する所謂崖の譬が茲であります。崖の上から一條の綱が下つてある。我々を助くる爲めに本願の綱が唯一筋下つてある。綱は唯一筋である。外には一つも無い。唯一筋しか無き故に「唯」であります。けれども其の唯一筋の綱が有るばかりで、我々崖の下に在る者が崖の上に引き上げられるのである。然るに其の唯一筋の綱を幾筋もあると思ひ、此の綱一筋と氣が就かぬ故其の綱を攫む氣にならぬ。之をお慈悲の上で言へば人生に我々の助かる道は南無阿彌陀佛のお恵みの外に無いのである。然るに猶ほ外に有ると思ふから其のお慈悲が頂けぬ。何か自分の心に努めて行き得るかやうに思つて居るから、自分自身の上に此の廣大のお慈悲が有難いと頂けぬのであります。然るに色々苦しんでやつて見ても自分の力では逆も駄目と解かり、最後に彌々斯の如き人生に眞實我を助け給ふは南無阿彌陀佛のお慈悲ばかり、此のお慈悲を賜はるは阿彌陀佛御一佛である、心から本願に氣の就く時は所謂『歎異鈔』の「たゞ信心を要とすとすべし」と頂く外は無いのであります。頂くお慈悲は唯一つなれども、此方の心で一つにならぬ間は、唯一つと頂けぬのである。彌々最後に突き當りて頼む所は御一佛、南無阿彌陀佛の一筋の綱があるばかりである、自分自身の上には唯一つと頂けた時が即ち唯一の信である。『歎異鈔』の上には如何にお示し下されてあるかといふに、

親鸞におきてはただ念佛して陀佛にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて信するほかに別の仔細なきなり。念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべららん。また地獄におつる業にてやはんべららん。總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらう。そのゆゑは自余の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄におちてさふらはばこそすかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ。いづれの行もおよびがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし。云云。

自余の行は仕て見やうも無き我々である。何れの行も及び難き身なれば、逆も地獄は必定の身の上である。外に仕て見やうは無い、唯斯の如き者の上に哀みします本願の一法の恭けなさよと心底から解かる處が肝心であります。能く世間には『歎異鈔』を讀みて、苦し紛れに法然上人の御教化をどうでも斯うでも信するのが『歎異鈔』の信仰であるといふ人がある。そんな信仰ならば甚だ力んだ唯一の信で面白く無い。世間の上でも眞に彼の人一人と思ふならば良けれども、此方から無理遣りに然う押付けて居るのは甚だ面白く無い。

之に就き善導大師の『散善義』の中には

深心といふは決定して自心を建立して、教に順じて修行して永く疑錯を除き、一切の別解別行異學異見異執の爲に退失し傾動せられざるなり。云云。

と言つて、設ひ三世十方無量の諸佛が廣長の舌相を出して汝



の所信は虚偽であると言はれても、其の語を用ゐずして信ずる通り動かぬのが眞實の信心であると仰せられてある。又『唯信鈔』には同じ所をば

深信といふは信心なり。まづ信心の相をしるべし。信心といふはふかく人のことばをたのみてうたがはざるなり。たとへばわがためにはいかにもはらくろかるまじくたのみたる人の、まのあたりよく／＼みたらんことをおしへんに、そのところには、やまあり、かしこにはかはありといひたらんを、ふかくたのみてそのことばを信じてむのちに、また人ありてそれはひがごととなり、やまなし、かはなしといふとも、いかにもそらごとすまじきひとのいひてしことなれば、のちに百千人のいはんことをばもちぬず、もときしことをふかくたのみ、これを信心といふなり。いま釋迦の所説を信じ、彌陀の誓願を信じてふたころなきことまたくのごとくなるべし。

とあります。即ち一旦深く信じた上は設へ如何なる人が顯はれて其の所には山無し河無しといふとも、更に動かぬのが信心の相である。所が此の意味を取違へて、深く頼む人の言はれた事故、設ひだまされても構はぬと言ふのなら、夫は本當に信じたのでは無い。彼の人の言ふことなら理が非でも疑はぬのであると、此方から無理押付けに押付けた迄である。之を『歎異鈔』第二章の上で言ふと、師匠法然上人のお言葉故説へすかされ參らせても更に後悔す可らず候と、親鸞聖人が力味心で言はれたかのやうに思ふのである。聖人が「たとひ法然上人にすかされ參らせて、念佛して地獄におちたりとも更に

たのであります。

扱て之は親鸞聖人が自己の罪惡を深く感じられる御性質であつたから、言ひ換ふれば聖人の御性格から來たのであるかと云ふに、『歎異鈔』第三章には宣はく。

善人なほもて往生をとぐ、いはんや惡人をや。しかるを世のひとつねにいはいはく、惡人なほ往生す、いかにいはいはんや善人をやと。この條一旦そのいはれあるにたれども本願他力の意趣にそむけり。そのゆへは自力作善のひとはひとへに他力をたのみこゝろかけたるあひだ彌陀の本願にあらず。しかれども自力のこゝろをひるがへして他力をたのみたてまつれば眞實報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらはいづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるをあらはれみたまひて、願をおこしたまふ本意惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人もとも往生の正因なり。よて善だにこそ往生すれ、まして惡人はとほほせさふらひきと。云云。

惡人猶ほ往生す、如何に泥んや善人をや、と言つて居るのは、出來るならば善い事するに如くは無いと思ふからである。夫は一寸聞くと如何にも最もに思へるが、其の實本願他力の意趣に背くものである。其故は自力作善の人は偏に他力を頼む心欠けたる間彌陀の本願にあらずと、出來るなら善事を仕度いと思つて居る者は、また彌陀の本願他力の眞意の頂けぬ者である。併しながら其の自力根性の遺つて居る者も其の諸行往生の意を翻して他力を頼み奉れば眞實報土の往生を逐る事が出來るのである。抑々佛の本願の御本意は、「煩惱具足の

後悔すべからず候」と仰せられたは、法然上人の仰せ故無理遣りにも信ずると言はれたのでは無い。自分は自余の行ては逆も行かぬ者である。何れの行にても及び難き地獄一定の身の上である。自分の助る道は唯此の彌陀の本願是れ一つしか無いと頂かれたのである。之を念佛といふ上より言へば、自分如き五逆十惡の惡人は、念佛の一道ならては仕ようが無い、自余の行は設へ取らうと思つても取る事の出來ぬ身の上である、然るに斯の如き身の上に、彌陀の本願念佛の一道がましますと聞く時は、之を信ずると言はれても信ぜずには居られやうかといふのであります。信ずるとは何かといふに、是れて無くては自分には仕様が無い、唯此の一つがある丈けであるとする所から、信ずると言はれても信ぜざるを得ぬのが、即ち信じたのである。法然上人の他の御弟子方にして見ると、御師匠法然上人が唯念佛の一つと言はるる所から、頻りに念佛は稱へて居ながらも、若し出來るなら外に善い事をして構はないのであるといふ思ひが有つた所から、頻りに念佛々々と言ひながらも逐ひ／＼諸行往生を生ずるに至つたのである。そうなる次第は何かといふに、自分は實に五逆十惡の大惡人である、一分の惡も責める資格の無い者であるといふ點が美しく分つて居なかつたからである。處が親鸞聖人になると、自分は實に何れの行も及び難き大惡人である。外に何とも仕て見やうなき身の上である。唯茲に本願の一道が居て下さる。此一道ならては仕様が無いと、無理遣りに押し付けられたのでは無い、自分の罪惡を深く思はるゝ所から此の本願の一道を信ずるとあつても信ぜずには居られ無つ

我等は何れの行にても生死を離るゝ事あるべからざるを哀み給ひて、願を起し給ふ本意惡人成佛の爲めなれば、佛の本願は初めから我々が煩惱具足の惡凡夫、何れの行にても生死を離るゝ事あるべからざる惡衆生なる事を見通し給ひて、願を起し給ふ本意其の惡人成佛の爲めである。も一つ言へば佛兼ねて我々が外に仕様の無き罪業深重の身の上なる事を見通し給ひて、戒ても可かぬ、修行でも可かぬ、唯慈み一つで助けると唯一の慈みを差向けて下されたのが彌陀の本願である。其の唯一の本願を我々は今日迄自分の罪惡に氣附かずして、彼是れ思つて來たのであるが、彌々最後に衝き當りて、此の慈みならずは逆も仕様が無い、頼む所は唯此の慈みばかりである。茲の處で兩方の味はひがひたと合ふのであります。ひ換へると彌陀の本願の廣大なる御親心の頂け處が、「親鸞におきては唯念佛して彌陀に助けられ參らすべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なきなり」のお言葉となるのであります。斯くの如く『歎異鈔』の二章三章でも段々深く味へば味はふ程深い味はひがあるのである。之を唯するゝと讀んで居ては肝要が頂けぬのであります。親鸞聖人が法然上人の御教化ならば何んでもよいと頂かれたのであるといふならば、夫は佛の本願を信ぜられたのでは無い、法然上人の人格を信ぜられた事となるのである。法然上人は何うかと言へば佛の御親心を知らせて下されたのが法然上人である。唯念佛して彌陀に助けられ參らすべしと知らせて下されたのが法然上人である。唯念佛して彌陀に助けられ參らすべしと、

設へ法然上人が虚言を言はれたのでも仕様が無い、我々に於ては唯此の廣大のお慈悲を頂く外は無ないのであるといふのが『歎異鈔』の御教化であります。

偕て斯くの如く頂く時は、實に是程有難い事は無い。三世十方を通じて、真に我々の頼りとなるは、此のお慈悲以外に一つも無いのである。之を物質的に言へば、財産も智識も何もならぬのである。設ひ全世界の富みを以てするも我々が此の眞實の安心の爲めには何とも仕て見やうが無い。又如何なる嘉言善行も此の一大事の爲めには更に何等の用をも爲さ無いのである。唯斯の如く罪深く障り重き者を哀れみ給ひて、十劫の昔に本願を建てさせられた。此の我がまことを届けずば正覺を取らぬとお誓ひ下された其の南無阿彌陀佛の下にある御親心、是ればかりが頼みである。此の外に當てになるものは一つも無い、唯是れ一つである。頂くばかりであります。而して斯く頂いた處で初めて要領を得た信心の味はひが味はれるのである。他力を聞きながら何うも要領が得られぬのは、此の本願念佛の眞意が美しく頂けぬからである。反へす、外に仕様は無い、唯此の恵みばかりと頂く此處の所が肝要であります。

之に就き今春以來美濃養老附近の方で屢手紙をよこされた或る一人の方がある。何うも其の手紙が何度來ても要領を得ぬ。勿論信仰以前は要領の得られぬのが當然であります。何うも其の方の言はれる事が頓と要領が得難い。其處で今度高須に参つたを幸ひ、是非に來なさいと言つて遣つた。其の様に熱心に手紙を遣された方故定めて熱心に話されるであらうと

は業報故仕方が無いと諦めようとして居らるゝのである。其處で私が申したには、人生と離して信仰を聞き度いといふやうなそんな横着があるもので無い。貴方は人生の事は業報故仕方が無いと言つて居られるが、其の業報の者を助けて下さる如來のお慈悲が有難いので無いか。此のお慈悲を頂かずして解決が着くなどいふは、とんでも無き横着であると、此の春以來の事を言ひ立て、眼の玉の飛び出る程叱り着けた。餘りひどかつたので此の方も驚いて又其の晩泊られる事になりました。

話が色々になります。丁度其日は光明名號といふ題でも話して、此方から親を捜すのでは無い。此方から如何程捜しても捜し當てられる我々には無いが、佛の親の方から久遠劫來我々を捜しづめにして下さるのである事を話しました。すると私について居る一人の青年がある。其夜丁度二時頃といふに、其の青年が突然眼を醒して俄に泣いて喜び出した。其處は長良川の堤に沿ふた一軒家で、夜は静かに處々鶏の聲などが聞こえる。殊に有難い事で、其の家の人々は今度私が参るといふので、新に夜具蒲團杯を新調して私を泊めて下されたのである。實に慚愧に堪えぬのであります。其處で今申す如く私の隣りに寝て居る青年が俄に泣いて喜び出した。何かとさくに夢を見たといふのである。其の話には私も涙を流したのであります。其の青年が言ふには、自分の親は自分の十三の時大地震後の洪水で死んだのである。其の死骸を捜しても何うしても分からぬ。とうとう五日目に自分の家の下より發見したが、其の時は顔形はもう確つかり分からぬようになつ

豫期して居た處が、來られての話が頓と要領を得ぬ。宿善の有無といふは何ういふ事か採といふ質問を出される。此の方の心では、多年求めて求めて得られぬ所から自分は宿善の無き者かと絶望しかつて居られたのであらう。猶ほ其の類の質問を頻りに出される。或は眞如とは如何なる事かと言はれる。夫は此迄信仰を求めて雑多の書籍を讀んで居られる所から自然さういふ風の質問をせられるのである。其外斯ういふ風の面倒な質問ばかり多い。私はそんな事を尋ねられると、お話しして居る暇が無いと申し、之は余程しつかりせぬと可かぬから、今晩は是非お泊りなさいと言つて、別院に頼みて其の方を泊める事にした。翌日は丁度二里ばかりの處へ参る都合になつて居つたので、私は矢張り此の方を連れて出かけた。半日程一生懸命で話すると、もう之で暇にすると言はれる。私は解りましたかと尋ねると、矢張りまだ判つかり仕て居ぬやうである。去りながら何れ又大垣か岐阜でお目にかかりてと言はれる。私は大に叱りて、そんな呑氣な事言つて居つては何時迄経つても駄目だからと言つて、又無理に引き留めて仕舞うた。矢張りまだ要領を得ぬ事ばかり言つて居られる。私は仕舞には腹を立て、貴方は人生の事と信仰の事を別々にして居るから可かぬと叱りつけました。すると其の方の言はるゝには、何うか信仰丈けてお話を願ひ度い、自分は人生の事は解決か着いて居る、唯一念歸命の味ひを聞き度いのであると云はれる。段々聞いて見ると此の方は脊髄病で多年の間苦しんで居られるので、自分で解決の着く如きそんな手易き境遇では無いのである。去りながら其の方は人生の事

て居た。去りながら自分には何うしても親が死なれたやうな気がせぬ。何んだか何處かへ行つて居られるやうな思ひがしてならぬのである。其後空しく一年二年と経ちて、二十五歳の今日では既に十年以上を経過して居るのである。近頃一家を持つようになつたので、何うかして親の自影を懸けて朝夕拜禮を仕度いと思ひ立ち、幸ひ自分の兄が繪書きである所から兄に書かせんと思ひつけられども、何分親の寫眞が無い。のみならず自分にもはつきりした記憶が無い所から、何うにも繪に書かせて見やうが無い。何うか夢になりとも一目見たいものであると兼ね兼ね思つて居つたのである。處が今晩不思議にも夢の中に親が歸つて來て下された。(丁度此の日の晝に親の方から名乗りを上げて下さるのであると話したのであります)其の姿が十三の時別れた當時の其の儘である。顔の形、眼の具合、頬の様子など全く其の時其儘である。兼ね兼ねあなたは他所へ行つて居られると思つて居つたのであるが、果して然うであつたかと話しつつ、顔の様子を見ると如何にも十三當時の親の姿があり、と眼の前にある。と思ふ中に眼が醒めたのである。と言つて泣いて喜び出した。私も近來是れ程有難い話を聞いた事が無いので、思はず涙がこぼれる。其の青年も、もう是れて立派な繪を書けると言つて泣いて喜んで居る。

處が初めに申した方が此の青年と同じ蚊帳の中に寝て居られたのである。此の話を聞かれてびつくりして仕舞うて物も言へぬ。やがて私の許に來られて漸く解りましたと言はれる。私が何う解りましたかと言ふと、昔より助かつて居たのであ

つたと解つたと言はれた。私が言ふには、そんな事があるものか。親の方よりあれ程求められて居ながら、此方は夫に背きて常に逃げ廻つて居たのでは無いか。親に背を見せて逃げ廻はつて居ながら、昔から助かつて居たとは何事ぞ。親が呼び捜して下さる御呼聲の勅命に氣が附いてはつと振り向いたが、初めて親とびつちり顔の合つた時である。と思はず勢に乗じて巖しく、話し込んだ。思ひ切り話して、さて夜も明けたから朝の勤行をして歸つて見ると、其の方が今度は彌々解りましたと言つて、其の儘其處にあつた『執持鈔』の上に一句を記された。

呼聲に玩具すてたる身輕かな。

今迄自分の計ひ心からあれども無い、是れても無いと苦しんで居たのは氣が附いて見れば小供の玩具に囚はれて居た者である。處が親の呼聲が耳に入つた瞬間、思はず其玩具から手を放して親の慈悲に振り向いた。此の一念が「唯」の眞味であります。親の呼聲に氣が附けば玩具は自のづから捨たるのである。蓮如上人が「もろく／＼難行難修自力の心をふりすてて」と仰せられたも茲であります。今迄美濃の此の方は此の玩具に苦しんで居られたのであるが、此の一念に大安心して、念佛稱へ／＼歸へられた次第であります。

すると一つ話がある。夫も丁度此の時である。年老いた一人の女があたりに氣兼ねしながら、度々私の座敷へやつて来てお了解を述べようとする。私が何時ももう夫で可い／＼と言ふものだから、甚だ物足らぬ様子である。傍に居られる方が言はれるには、先生は随分不公平である、美濃の男は歸へ

ると言ふのを無理に引き留めて置きながら、一方はあれ程來

るのにもう可い／＼とはかり言つて居ると言はれる。之は何かといふに、女の方は安心して居る様子が其の態度に見えて居るから、もう話するに及ばぬのである。果して後に聞けば其の女の家は一家中が皆信心者で、其の一身の喜びを私に聞いて欲しかつたらしいのであります。處が一方の美濃の方は自分で親を捜し廻はつて居られる有様が其の様子に顯はれて居る故、之は何うしても遁がしてはならぬのである。信仰を聞く爲め來られた人に何に遠慮が入る事か。私は思ひ切り引き留めた次第であります。去りながら信仰の上より言ふ時は引き留めたは私なれども、佛は此の通り遁げ廻はる我々を晝夜不斷に追ひ求めて居て下さるのである。然るに此方では何と言つて居るのであるか。「人生の事は解決が着いた」とか、「昔より助かつて居ると解つた」とか。恰も自分の方より處置して行く積りになつて居るのである。實に勿體なき次第であります。佛は如何にして下さるかといふに、設ひ我々が解つたと言つても眞にお慈悲の解る迄は何處々々迄も附き纏ひ、追ひ求め、引き留めて、飽迄我々に眞の恵みをお知らせ下さるのである。而して此の廣大の御念力が届いて下されて、初めてお慈悲に振り向いた一念が、唯此のお慈悲一つと頂けた時であります。之が唯一の信の味はひであります。

猶ほ此の外に今度の傳道中には色々得させて頂いた處が非常に多い。殊に『歎異鈔』につきては私が年來の大問題を知らせて頂いて實に喜びに堪えぬのであります。此の事はいつれ明日求道學舎に於て、『歎異鈔』の證文に就いて」といふ題でお話する積りであります。南無阿彌陀佛。

## 聖傳

### チャータカ釋尊傳

#### 第二十九 鶉の喧嘩

世尊カピラヴツツの近傍ハンヤン園にましまし、時なりき。或争につきて次の譚を以て其一族を諭し給へり。

主は彼等親屬を戒めて「我貴公子等よ、一族が互に諍ふは最も宜敷からず、畜生すら共に相和する時はよく敵に勝つことを得、相離るゝ時は大難をうくる事あり」とて彼等の請により次の譚をかたり給へり。

昔フ라마ダツタ、ベナレスに統べし時、菩薩は鶉の生を受

け、數しれぬ大群の長となりて森に住みぬ。されば鳥さしは折々此森に來りて其鳴聲をまね鶉數多集ひ來るや其上に網を投げ、手早く一方に片よせて壓し殺し、籠につめて家にかへり、そを賣り拂ひて生計を立てぬ。

菩薩たる親鶉は是を憂へ、一同に向ひて云ひける様、「彼鳥さしは我が親屬や近親を困厄に瀕せしむ、今我は一つの計略をおもひつゝぬ、其は若し彼人汝等の上に網をうたば、各自網の目より頭を差し出し心を合せて網を持ち上げ一定の場所へ網と共に飛ひ來り、荆棘の叢の上へ下るへし、然らば汝等

は其下より逃るゝを得ん」と

これに對して鶉は皆同意したり。次日網をうたれし時は皆相共に菩薩の命を守り、網の目より頭を出し、それと共に飛び行きて荆棘の上に之をのこし、己等は其下より易々と逃るゝを得たり。鳥さしはいと驚き網を荆棘より取らんとするうちはや日はくれて空の籠もて家にかへりぬ。

かくて鶉はいつも此の如く振舞ひて鳥さしを惱ましたり。彼は終日網をほぐるに費して何の獲物もなく家へかへるを常とせり。

彼の妻はあまりの事に打腹立ちて「日々空手にてかへるは何たる事ぞ、これより汝は場所をかへて試みよ」と叫びぬ。「愛する者よ、我は他にとるべき場所なし、我は何故なるかを汝に説かん、そは此等の鳥皆相和して一致せり、されば、我網をうつや否や、鳥等は協力して是と共に飛ひ去り、荆棘の上を下りて網をば残し逃れ去るなり、されど彼等もいつまでか一致すべき、汝は此事を思ひ煩ふ勿れ、彼等相そむかば我は必らず一羽づゝにても捕へてかへり來らん、さらば汝の顔に笑をなすべし」とて歌ひて曰く、

鳥が相和す上からは、

網をも持ちて逃るべし。

されど一度争へば

彼等は我のものならぬ。かくて數日は經ぬ、鶉の一羽おのが餌をあさりつゝ、地上を嬉しげに歩み居りしに、仲間なる鶉の頭をおもはず踏みたり。

「誰が我頭を踏みしや、」

と怒りて問ひぬ。「我は汝の頭を踏む心とはなかりしなり、怒る勿れ」と、一羽は詫びぬ。されど他はなほ怒りを静めず、互に言葉返すうち「さらば汝が踏みしなるか、誰が汝の爲に網を持ち上げるものぞ」といひて果もなかりき。

菩薩は此争をみて、おもへらく、「喧嘩する者には信頼する能はず、もはや此等の鳥は網を持ち上げざるへし、やがて彼等は難義すべし、鳥さしは又彼の時を得ん、我は敢て此處には止まらじ」とておのが近親の一族を従へて他の場所へと移住しぬ。

鳥さしは數日へて來り、鶉の鳴聲をまね、共に飛び來りし鳥の上に網を抛げぬ。鶉の一羽は叫びて曰く、

「汝が網を上ぐる時は汝の頭の毛は抜け落つることなふ、いざもち上げよ」と、他は又叫びて曰く、

「汝が網を上げん時は汝の翼はすり切れんとす、いざもち上げよ」と。

かくの如く互に他に網をよけん事を求めつゝある間に鳥さしは網をなげて共にしめくゝり。籠に入れて妻の笑顔をみんとかへり行きぬ。

世尊此譚を終へ給ひし時語をつぎて宣はく、「彼の愚の鶉は提婆達多にして賢き鶉は我身これなりき」と。

### 第三十 舞孔雀

世尊ジュクタバナに於て、奢侈なる僧に就き次の譚を説き給ひぬ。此場合は先の「眞の聖なるもの」といへるに同じ。

師は彼に問ひ給ひぬ。「僧等の云へるが如く、汝は奢侈なる

王、娘をよびむかへて曰く「いざ來りて汝の尤も好む鳥をえらぶべし」と命じたり。

娘は群鳥を見渡しふと孔雀に眼を止めぬ。寶石をつらねたる如き輝ける頸、雑色の鮮なる尾麗はしさいはん方なし。彼女は次の語もて撰擇を終りぬ。「此鳥を我夫たらしめ給へ」と。

されば鳥等は皆孔雀の傍に行き、賀して曰く「友なる孔雀よ、王の娘鳥はかくも多くの鳥仲間より、彼女の婿を撰びて汝をとりぬ」と。

孔雀はいと得意氣に「汝等は今日まで我が偉大なるを知らざりしならん」と言ひて歡のあまり、禮儀作法もあらばこそ、翼を擴げ廣き群集の前に於て躍り始めぬ。此舞踏によりて彼はあのが無値をあらはしぬ。

時に王なる鶯鳥は呆れ果て曰く、此奴は禮をしらざるのみならず行常軌をはげれたり。我は我娘をばかゝる者へはやらじ。彼は破廉耻漢なり、とて彼は群集にむかひ次の偈をいひぬ。

汝のさけびは快くなれの脊はいと麗はしし。

オバルの色のがうなじ、

尾の一尋も長さあり、

されど舞踏者へ我娘、やるをうべきか、やよ君よ。

王は大衆の前に於て遂に彼が甥なる若き鶯鳥に娘を遣しぬ。されば孔雀は美しき賜物を得損ねし耻しさに居たゞまれず立ちて空はるかに飛びさりぬ。

王はあのが住居にかへりぬ。

師は此本生譚をよへて曰く、奢侈なる僧は孔雀にして我は

か」と。

「そは眞なり、世尊よ」と彼は答へぬ。「如何にして汝は奢侈に傾きしや」と師は始め給ひぬ。されど、僧はなほ聞くをまたて、荒れ出て衣を裂きすて下衣をもぬぎて叫んで曰く「さらばかくの如くならん」とて如何なればとて程こそあれ世尊の御前に裸體にて立ちたり。

觀るもの叫びて「耻しらすよ」といやしめしに、彼は忽ち走り去りて俗人とはなりぬ。

僧等説教の室に集りて彼の失態を評しあひて、「世尊の其御前にて裸體となる」とはと呆れ居りしに、世尊入り來り給ひ其語れる話を聞きて共に座したまひぬ。

「世尊よ、我等は君の御前に於て、恰かも里の子の如く裸體にて立ち何の憚る處もなき彼の僧の事を語りあへり、觀るもの彼を辱めしに彼は遂に俗人となりて信を失へり」と彼等は曰ひぬ。

時に世尊のたまはく、「オ、僧等よ、彼は今世禮儀なき爲に信の寶石を失ひし如く、前世亦同じ原因により妻の寶玉を失なひぬ」とて語り出でたまへり。

太古世界の始めに四足獸は其王に獅子を、魚はレピアサンを鳥は金色の鶯鳥を擇びぬ。

王なる金色の鶯鳥は一羽のいとも眉目麗はしき若き娘をもちぬ。一日彼は娘にあのが最も好む者を婿にえらばしめぬ。かくの如くあのが娘に撰擇の權を與へて彼はヒマラヤ州における鳥類總てをめしぬ。されば鶯鳥の群孔雀の同類をはじめ、種々雑多の鳥岩上の平處に集ひ來りぬ。

其王なりきとのたまへり。

### 第三十一 魚と其妻

世尊ジュクタバナにおはし、時、或僧が其先妻によりて誘はれんとせるを見給ひ、彼を説き給ひし事ありき。

世尊彼に問ひて曰く「汝は戀愛に沈めりと云へるが眞なりや」と。

「そは眞なり世尊よ」と彼は答へ奉れり。

「何物が汝を悲しましむるや」

「其手に觸るゝ時はいと樂し、彼女は我が世俗の妻なり。我は彼女を捨つる能はず」

世尊宣く「オ、兄弟よ、此婦女は汝に仇をなす、前世亦汝は彼女の爲に殺されんとせり、されど我來りて汝を救へり」とて次の譚を語り給へり。

昔ブラマゲツタベナレスを統べし時我は其法師なりき。其折の事なり。或漁夫等河に網を投げ居たりき。時に一尾の大なる魚彼の妻と共に戯れつゝ游泳し來りぬ。彼女は彼の先にありて網の香を嗅ぎしかば素早く身をかはしてそを逃れぬ。されど色に溺れたる雄は網の口へと入りたり。

漁夫は網をひきて魚のかゝりしを知り、魚を出して沙の上に生けるまゝ投げ出し、共に喰はんとて火を起しぬ。

魚は悲痛に堪へかねていへる様、「火の熱も我を害せじ、又地獄の責苦もいとほじ、されど唯我妻は我が他を慕ひて彼を見捨てしこと、おもひて悲しみはせずやとこれのみ怖るべき苦痛なり」とて歌ひぬ。

熱も寒さも苦まず、  
網の責苦も厭はねど、  
もしや我妻我上を、  
おもひ煩ふ事もやと  
これぞ心を苦ましむ。

と。折しも法師は淺瀬に浴せんとて彼の僕と來りぬ。彼は總ての生物の言葉を了解するをもて魚の悲歎を聞きおもへらく、「此魚は罪ある悲歎を悲しむ、かゝる不健全の心の様にて死せば、彼は必然地獄に生ずべし、我は彼を助けん」とて漁夫の許に到り曰はく、「我よき人よ、汝は日々カレーの爲に我許へ魚を運ぶや」と。

「何をのたまふや、君のよき魚をとり給へ」と漁夫は答へぬ。

「我はこの一つの魚のみを欲す」

「さらばとり給へ君よ」

菩薩は手づから彼の魚をとり、川の岸に座して曰く、我よき魚よ、もし我汝を見ざらば汝は死すべかりしなり、もはや罪を作らざれ」と、之を戒しめ水中に投げ市にかへりぬ。師は此説教を終りし時眞諦を述べたまひぬ。其終りに悲哀にしづみし僧は悟りの界を待たり。師は因縁をときて曰く、「雌の魚は汝が先妻にして、魚は汝、法師は我なり」と。

### 第三十二 聖なる鶉の話

世尊嘗てマガダ國を旅したまひし時藪の火事につきて説きたまひき。

場所を焼かざるは我が今有する力の爲には非ざるなり、そは我が前世の行爲の力なり、此場處は如何なる火と雖も一カルバは焼くあたはず、如何となれば奇蹟は一カルバ保たるべければなり」と。

此時敬虔なるアナンダは四に折りし衣を擲げ師の爲に御座としておきぬ。師は此上に自ら座したまひ、跣したまへり。弟子等亦周圍に恭しく座し、世尊に請願して曰く、

「今起りし事實は我等是を知れり、過去は悉く祕されたり願はくば我等に知らしめ給へ」と。

されば世尊次の譚を語りたまへり。

昔世尊はマガタたる此場所に於て鶉の生を受け住したまへり。卵にて生じ殻を破りて大なる鶉鴉ほどの大さの若き鶉となりぬ。彼の兩親は巢にまだ彼を入れおきて彼等の嘴にて運び來れる餌にてやしなひぬ。若鶉は彼の翼をもひろぐる能はず空中をも飛ぶあたはず、足を立て、地を歩むすら能はざりき。

此のあたりは藪にして年々に繁茂せり。或時火事起りしが火勢強くして遂に此藪にも移りぬ。鳥の群は驚き起ちて叫びつゝ巢を逃れ出てぬ。菩薩の親亦おそれて巢を捨て、逃げぬ。

菩薩なる雛鳥は巢より頭を差出し大火のよせ來るを眺めておもへらく、「若し我翼を擴ぐる力をもたば空中を飛び、足たゞば地をはいて逃るべし、されど我はしかなす能はず、我親も我をのこして怖のあまり逃げ行きぬ、我は何の助けをもまつ能はじ、今我は如何とすべし」

マガダ國なる或村に乞食したまひし後、世尊は食事を爲したまひ、終りて又弟子等に具奉せられて出て立たせたまへり。折しもあれ道の傍なる藪に大火は起りぬ。火は益々勢猛になりて炎と煙の塊は彼等の方へ擴まり來りぬ。いまだ信を得ぬ僧等は恐怖して叫んで曰く、「反火を放て、さらば大火は反火によりて燃えし處より此方へはよせ來るまじ」とて火棒をとりにだし火を出さんとせり。

されど他は曰く「兄弟よ汝は何事をか爲す、そは月の大空高くかゝるを見ず、太陽の東方より數千の光明輝き渡りてのぼるを見ざるに等し、又海邊に立ちて大洋を認めず、シネルに近く立ちて大岳を見ざる人の如し、天地に於ける最大の聖者と共に旅しながら、大火を恐れて反火を放たんとするは優れたる佛陀を認めざるものにあらずや、汝は佛陀の力を悟らず、來れ世尊に行かん」とて前後しつゝ大群にて無限なる大智者のみもとに近づきぬ。

彼處に佛陀は大衆に圍繞されて止まり給へり。藪の火は彼等を難澁せしむる如く逆を渦巻く斗りよせ來りぬ。

大火は今や大衆をも浸さん斗りよせ來りしに、大靈の立たせ給ふ處により十六ロッドほどにてはたと止りぬ。恰かも炬火を水中に突き入れしが如く、三十二ロッドの地をのこして進むにあたはざりき。

時に僧等は師を讚歎して曰く、「如何に驚くべきかな、佛陀の御徳は、無覺知なる火さへ佛の立たせ給ふ處を過ぐる能はざるとは、オ、佛の力は大きなかな」

此讚美を聞き給ひて佛陀は曰く、「僧等よ大火の我が立てる

されど此時彼は思ひ浮びぬ、「此世に徳の大靈在せり、眞の大靈在せり、過去に永劫大徳を積みたまひ、菩提樹下に大覺を成りたまひし佛陀存したまへり、彼等は善行と熱誠なる思より起れる大智の力により救済を得、又其救済の智を他に示し給ふ力を得給へり、佛陀は眞實同情、慈悲、苦行に滿ち給へり、彼等は一切衆生の平等の大慈を下し給ふ心を持ち給へり。我に對しても亦眞實は一つなり、一つの永久なる眞の信仰ある他なし、さればこは我に最も適すべし、即ち過去の佛と彼等の得たまへる徳を觀じ我に於ける信仰によらん、こは即ち眞實を行ふ大行にして火も焼くあたはず、他の鳥も共に救はるべし」と。

世界に徳の力あり、

眞實、清淨、大慈悲の

佛の御名にたよりつゝ、

われは奇蹟を行はん。

信の力を觀じつゝ、

過ぎにし勇士をおもひつゝ、

眞の力にたよりてぞ

我は奇蹟を行はん。

かくて菩薩は佛の恩を觀じつゝ、彼の内心にある信仰により貴き誓をなして眞實の大行を行なひ偈を云ひぬ。

飛ぶに堪ふべき翼なく

歩むに堪ふる足もなく、

わが親も亦逃げゆきぬ

おゝ大猛火、やよかへれ。

彼の眞の行により大火は十六ロッドの隔に退ざき勢やうやく衰へて再び森をも焼かざりき。恰かも火炬を水に入れし如く消え失せぬ。

大行の爲我が爲に

大なる炎はしりぞきぬ。

十六ロッドの地をのこし、

水に入れたる火のごとく。

而して此場所は全カルバを通して再び火に焼かるゝ事はあらず。こは一カルバ保たるゝ奇蹟とはいふなり。菩薩は彼の命終の後彼のなしゝ行に従つて過ぎぬ。

師此譚を終へたまひし時眞實を説きたまへり。此説教の後、或者は信を得、或者は第二第三或は第四の果を得たり。師は因縁をときあかして曰く、鳥の兩親は今の我兩親にして鳥は我身の前生なりとのたまへり。

抑、往生は我が知る所に非ず。彌陀の五劫光厳永劫の佛智のみわざにてこそ、凡夫も不思議の往生をば得るなれ。我生すべき身と成り立ちて生ずるに非ず。何ぞ我が善惡に身づくろひして佛力を次にするや。たゞまいるまじき身のまいるは横超の願力ぞとしるべし。

凡そ自力の人は佛願を前におきて的にして、己が心行を弓と箭にして射ばづさじとしかゝるなり。下手はおぼつかなし。是れ行者より佛にゆける自利の進趣なり。他力の門はこのうらなり。行者を前へおきて的として、佛の慈悲を弓とし、廻向を弦とし、願行を矢として射中て玉へりとしるべく、是れ佛より衆生に來る利他の信心廻施の利益也、不廻向の義亦是れ也。

（惠空語錄）

告白

不可思議の味ひ

私のわづかな半生をつら／＼想ひめぐらして心にうかび來るものは、唯宗教上の復活が莊嚴なる事實として來り、抑へても抑へがたい熱い涙が眼をうるほすのであります。言葉もこの事をあらはす用をなさない。筆もこの事實をうつすことは出來ない。五年の昔、三十七年の暮れに罪業重い私は曠劫多生の間あともさきにもない一大事に相遇したのである。この日、この事、不可思議である、

我れ何をか言はんや、我れは我を抱きて遠く佛を仰ぎたり、然るに機到達し、業つきてか、明治三十七年十二月二十五日、不可思議なる慈光に接し、我が微塵の肉塊の一々より雲霧をりて歡喜忽然として來り、我れはその我れなる自ら疑ふほどに精神は新らしき生命を得て狂喜するばかりでありました。世擧つて宗教をすてんも私にははなれない力があります、八萬の教門は滅するも、幾萬の寺塔は滅亡するも佛の力は私をはなれないのであります、疑はむとして疑はれない、世界は微塵にこわされても佛力は私の上に加はつて居る、佛の力はどの位のものかわからないのであります

す、もう實に……… この時を想起する私は思ひのまゝ心のまゝ泣きに泣きたり、泣かすには居られな、この悲喜の涙は信樂の人誰れもあることであらう。

二

どんなに書いた所で、いかに口に言ふたところで、それは眞の味ひではない。けれども今日より強いて筆にあらはせば「不可思議」の一句である。あの阿彌陀如來の自在神力に不思議せられた一念の間に叢林荆棘の野原の如き身心は百花のさきみだれた花園の様と化したのである。

如來の智慧海は深廣にして班底なし、二乗の測り知る所に非ず、唯佛のみ明せりと、私の芥子の如き心で佛陀の智慧海に對する時は不可稱不可説不可思議と驚嘆するの外はないのであつて、五逆罪裡に迷ふた私も、極重惡の巷に入つていた私にも、加來の不可思議なる絶對の大慈光は刹那々々に極微々々に入りみちたまひて、無明の大夜をながく迷ふて居たる私を大悲の願船に乗せて光明の大海にうかべしめ、至徳の風靜かに來りて衆禍の波を轉ぜしめて人生の苦海を渡りて無量光明土を到らしめたまふ、しかも如來の大悲は有漏の穢身をすてざる今日今時より不可思議なる神力を加へたまひて極微々々刹那々々はなれたまはないのである

三

「不思議不思議である、」眞に私にはこの一句が法味の終始

を一貫して居る。誓願、名號、信樂、報謝、往生、成佛等の往相も還相も一事として不可思議ならざることはないのである。世間出世ともに不可思議海に終歸するのである。私がこの不思議を味ふたのは偶然ではない、私に一人の敬虔眞摯に佛法を味はれた祖母が在はした。私はまだ學校に行かない時の事であるから五つか六つの頃である。一夜祖母とともに寢についた時、母祖は私に「念佛せよ死んだら極樂に行くのだ」と自ら稱名念佛を口にたやさず私を愛撫したまふた。その時に私は子供心にもいぶかしく思ふて「お祖母さまどうして極樂へ行くのであります」と問ふた時に「不思議、不思議の外はない」と相かはらずうらうらと念佛したまふた、今も耳にその聲が残つて居る様である。時に私は「不思議と云ふことは」と、そのわけがわからなくて夜深くとやかく考へた。その後私か中學の時代に「坊主」と云へるものの社會からいみざらはるゝことが乞食の様であるので、眞面目に身を擧して人生に自己の行路を開かんとして終に佛教をすて外教に入り、また根底より打ちこわされてこゝに不可思議の信樂を我が心に獲得さして頂いたのである。十方微塵世界にみち／＼たる不可思議そのまゝを味ふは如來よりたまはる不可思議の信樂によりてのみ味はるるのであります。

四

眞實の不可思議の味ひは人間の思議、不思議の外に超絶して居るのである。眞實にこの不可思議が身にも心にも隅々までひしとみち／＼て不可思議の如來の慈悲不可思議の如來の

光明に丸めらるゝの時人生の事々物々々々が不可思議海に歸せざるものはない。言ひかへれば佛天の計ひである、凡心の思議、計ひをさしはさむところではない。現に口に悪を言ひ、身に悪をなし、心に悪を念ふて餘樂なく愁歎の聲をもて暮らして居るこの身が常に恒に佛天の不可思議力に計らはれその計ひを信じて眞實の不思議の力に生くるのである。大は有情の始終である死生より、その死生の間の生活がみな佛天の不可思議の方に計はれてある。私どものあさましい生活は見るもさくも念ふも煩惱隨煩惱の凝りなしたるものであるが、一事として一物として不可思議なる佛の力をはなれあるものはないのであります。噫々本願も不思議である、名號も不思議である、信心も不思議である、報謝も不思議である、往生も不思議である、何ももの不思議でないものはない、この深遠なる不思議を味ふは本願の大道の外になく往生の外に方法はないのである。心靜に味へば本願も往生も人類の根性に相應したる善巧の方便である。

五

まことにござかしきことはりをのみ申して不思議の佛智を我が顔にすることは淺間ましきことで、何事も佛の不思議に計らはるるを眞實の信樂にて一向に一心に味ふの外はないのであります。(謙恭)

慶讚

十七憲法

近角常觀

第二條 (續)

聖德太子が篤敬三寶、三寶者佛法僧也と申された。其佛法僧とは何であるか、古來より三寶を辨ずるときに、必ず何人も繰返す所の同體の三寶、別體の三寶、住持の三寶の三種何れも皆三寶である。皇太子が三寶興隆の詔を發して法隆寺初め諸寺を建立して佛を尊崇し、勝鬘維摩法華三經を講じて法を貴び、慈惠慈便を初めとして僧を敬せられたは即ち住持の三寶である。而して此等三經を講説し、義疏を作りて自ら佛の在世に遇ひたまひし心地を以て靈山會上に列り、維摩文殊の不二法門に參し、面り勝鬘夫人の所説獅子吼を聞きたまひし有様は別體の三寶である。而して遂に治生産業皆實相を實現し、默不二の法門を實驗し、自ら佛子勝鬘と名のりて其十大受を體讀して、三寶歸依の第一義に明達せられたが同體の

三寶にして、即ち皇太子の眞面目である。今憲法に則四生之終歸、萬國之極宗と斷言せられたるが是である。然らば其同體の三寶に歸依する第一義の眞髓は如何。吾人は皇太子自身の信仰告白とも申すべき勝鬘經夫れ自身の上にあらはれたる歸三寶章を以て、皇太子の信念を伺ひ奉るべきである。曰く

若有衆生、如來調伏、歸依如來、得法律澤、生信樂心、歸依法僧、是二歸依、非此二歸依、是歸依如來、歸依第一義者、是歸依如來、此二歸依第一義是究竟歸依如來。

三寶歸依の結局は如來に歸依する一であるといふのである。歸依法僧の二は歸依佛の一に結歸するのである。是れ皇太子が二歳の時南無佛を稱へたまひし所以である。而して其有様を述べられたる勝鬘經の文は、如何に適切に我等が如來に歸依すべきかを示されてある。抑々如來に歸依するは、我より先づ歸依する自力歸命に非ず、如來に調伏せられて如來に歸依する他力歸命である。而も法の律澤を得て信樂の心を生ずとは如何にも他方信心の眞相其儘なるには仰嘆せずには居られぬのである。願成就の文を拜し、彌勒附屬の文を生き寫しにした心地がする。親鸞聖人か則是具足無上功德の則の文

字を釋して

則といふはすなはちといふ、のりとまうすことばなり。如來の本願を信じて一念するに、かならずもとめざるに無上の功德をえしめ、しらざるに廣大の利益をうるなり。自然にさま／＼のさとりをすなはちひらく法則なり。法則といふははじめて行者のはからひにあらず、もとより不可思議の利益にあづかること自然のありさまとまうすことをしらしむるを法則といふなり。一念信心をうるひとのありさまの自然なることをあらはすを法則とはまうすなり。

と申されたるが如きは法の律澤を得るといふ味である。法則、法律とかいふ文字に、澤といふ味をいたゞけるのが即ち自然の法則なればこそである。そこで信樂の心を生ずとは如何にも如何にも適切である。本願の信樂、成就の信心歡喜たることは言ふまでもなく信卷所引の華嚴經の歡喜信心無疑者速成無上道、與諸如來等、若くは信樂最勝甚難得とか、修三行巧方便、則得信樂心清淨、若得信樂心清淨、則得增上最勝心云云とあると同じく、一切經中の信樂は皆如來を淨信愛樂することである。其如來とは如何。如來とは如何にましますか。法僧に歸依するが如來に歸依するのである、第一

義に歸依するが如來に歸依するのであるとは、如何に歸依するるのである。勝鬘經自身の御說法を拜すべきである。曰く

世尊如來無有<sub>レ</sub>限齊時住、如來應等正覺後際等住、如來無<sub>レ</sub>限齊、大悲亦無<sub>レ</sub>限齊、安慰世間、無限大悲、無限安<sub>レ</sub>慰世間、作<sub>レ</sub>是說者、是名善說如來、若復說言無盡法、常住法、一切世間之所歸依者、亦名善說如來、是故於<sub>レ</sub>未

度世間、無依世間、與<sub>レ</sub>後際等、作<sub>レ</sub>無盡歸依。如來は無限の如來である、無量壽の如來である。無限の大悲である故に無邊光であり、無量光であり、無碍光である。盡十方無碍光如來である。十方衆生の所歸である。法滅盡後百歲止住の法である。而して憲法の文にも四生の終歸萬國の極宗なり何れの世何れの人か此法を貴ぶに非らんとあるは、實に善く如來を説くものである。而して親鸞聖人の説かれたる歸命無量壽如來、南無不可思議光は實に善く如來を説くものである。是即ち第一義乘である。大乘至極である。究竟一乘である。故に勝鬘經に曰く、

得<sub>レ</sub>一乘者、得<sub>レ</sub>阿耨多羅三藐三菩提、阿耨多羅三藐三菩提、即是涅槃界、涅槃界者、即是如來法身、得<sub>レ</sub>究竟法身者、則究竟一乘、無<sub>レ</sub>異如來、無<sub>レ</sub>異法身、如來即是法身

はなり。畢竟從來世人の眼に映ぜざる聖德太子と親鸞聖人ととの關係を闡明せんとするのである。三寶歸依を歸依佛の一に結歸し、其佛は無限大悲の如來であるといふことは、勝鬘經の所説と、親鸞聖人の化卷に三寶歸依を眞の佛敎の眼目とし、眞佛土卷に其眞の佛を盡十方無碍光如來といふこと、全く符節を合せたるが如くなるも、是等は必しも、勝鬘經に依りて此の如く解釋されたのではない。兩聖人が精神一致なるが故に、事々に一致を見出すことが出来るのである。今の三寶歸依の如きも其一である。又何れは後條に於て詳かに辨するつもりなるも、第十條の文句及皇太子の遺訓とが、嘆異鈔結文中にある「聖人のおほせには善惡のふたつ總じてもて存知せざるなり。乃至煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、みなもて、そらごと、たはごと、まことあることなきにたゞ念佛のみずまことにておほしますとこそおほせはさふらひしか」とある御言と一致するとき、あまりに符合するので不思議である。直に皇太子の御言によりて申されたか、否や、何れにしても御精神の一致より出てたるものと確信する。併此一乘海の釋が勝鬘經の文字を其儘用ゐられたことは、精神の一致たるのみならず、文字の一致である。猶進みて言へば即ち精神

得<sub>レ</sub>究竟法身者、則究竟一乘、究竟一乘、即此邊不斷、

とある。而して已上は聖德太子の理想たる勝鬘經自身の文字を以て、皇太子の三寶歸依の精神を發揮し、無限の如來に歸依する第一義たることを明らかにしたのである。しかるに不思議なる哉、親鸞聖人の行卷に、一乘海の釋に至りて御自釋に此文を用ゐて、而も勝鬘經と言はずして、直に第一義乘は誓願一佛乘と言ふてある。曰く、

言<sub>レ</sub>一乘海者、一乘者大乘、大乘者佛乘、得<sub>レ</sub>一乘者得<sub>レ</sub>阿耨多羅三藐三菩提、阿耨菩提者即是涅槃界、涅槃界者、即是究竟法身、得<sub>レ</sub>究竟法身者、則究竟一乘、無<sub>レ</sub>異如來、無<sub>レ</sub>異法身、如來即法身、究竟一乘者即是無邊無斷、大乘無<sub>レ</sub>有二乘三乘、二乘三乘者入<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>一乘、一乘者即第一義乘、唯是誓願一佛乘也。

此行卷一乘海の釋が勝鬘經の一乘の釋を直に用ひたまひしことは、一點も疑を容るべきの餘地なし。而して表面少しも其様子もあらはれない。是如何に親鸞聖人の眞宗が深く聖德太子に淵源するかを知るべき第一の證據である。今此事に論及するは十七憲法を機會として慶讃し奉る次第にして、必ずしも憲法に三寶とあるを解釋する爲に、此の如く穿鑿するので

の一致を來す原因を示すものであらねばならぬ。即聖德太子と親鸞聖人の歴史的關係を語る的確なる證據である。私は久しき已前より兩聖人の歴史的關係につきては深く信する所ありて色々と感じ得る點多き故に、此機會に於て之を發表しやうと思ふ。併其歴史的關係といふは親鸞聖人の歴史的事實にして、要するに聖人が感得されたる聖德太子の神秘的靈告である。即ち古來漠然として傳へられたる靈告を明らかにし、其感想より現はれたる聖人の信仰及文字を明らかにせんとするものである。而して今の一乘海の釋に勝鬘經を用ゐられたは最も著しく其事實を語るものである。即ち行卷に法然上人の撰擇本願念佛を挙げ來りて、是れ聖德太子の宣へる大乘一乘である、第一義乘である、即ち誓願一佛乘であるとの斷定である。是れ親鸞聖人自身の上に、聖德太子の大乘と法然上人の誓願との連絡的事實なくてはならぬことを明言するものである。和讃に曰く、佛智不思議の誓願を、聖德皇のめくみにて、正定聚に歸入して、補處の彌勤のことくなり。由是觀之從來傳ふるが如く聖人が求道得信につきては、聖德太子の御導きの事實あることは確である。然るに幸にして本年其事實を明示する聖人の直筆を拜見したるによりて、之を大方



と共に鑽仰したいと思ふのである。  
本年三月下旬伊勢一身田高田派本山專修寺に參詣して、特別の恩許により多年の宿望たる聖人の眞筆たる聖人夢記を拜觀することを得た。此眞筆は覺信尼公の望によりて聖人か書き與へられたるものなれば、夢の記と共に御消息が附きてある。今其文を掲げて同朋諸君と喜を分つ次第である。

親鸞夢記云

建久二歳辛亥暮秋仲旬第四夜

聖德太子善信告勅言

我三尊化塵沙界 日域大乘相應地

諦聽諦聽我教令 汝命根應十餘歳

命終速入清淨土 善信善信眞菩薩

正治第二庚申十二月上旬

省南无動寺在大乘院同月下旬終日

前夜四更

如意輪觀自在大士告命曰

善哉善哉汝願將滿足

善哉善哉我願亦滿足

建仁元歳辛酉四月五日夜寅時

六角堂救世大菩薩告命

善信言

行者宿報設女犯

我成玉女身被犯

一生之間能莊嚴

臨終引導生極樂

干時建長二庚申四月五日

愚禿釋親鸞 七十

書之

釋覺信尼江

御文くはしく承候わざとも

申入へく候にかたみと御望ゆへ

四十八の御願文にしへの

夢の御文とも書きてまわらせ候

いきて候へはまた對面にも

しかく申まゐらすへく候

何事も疑なく御安心たし

ろがせたまはて御念佛させ

候よしめてたき事にて候なり

他方には義なきを義とす

とは申候なり只く御はからい

なく御本願にまかせいよく

御念佛候へし

かへすく

南無阿彌陀佛

四月五日

かくしん江

親鸞

花押

御筆蹟といひ、御文句といひ、一點の疑を挟むべき餘地なき聖人の直々の御書である。吾人は深く拜觀を許されたる恩許を感謝し奉り、又聖人の御冥祐を感佩謝恩し奉る次第である。恰も聖人が選擇集に對して仰せられたるが如く、希有最勝の華文にして、此見寫を獲たることに實に悲喜の涙に堪えざる次第である。而して此靈告を此所に掲げたる所以のものは、前來述べ來りたる選擇本願と大乘一乘との關係を明示せんがためである。而して、私かに考ふるに、聖人一代の教化、眞宗の眞髓は此告命と聯關する所頗る著しきものである。事少

しく穿てるが如き嫌なきに非るも、此機會に於て我信する所を披瀝して見やうと思ふ。

聖人は十九歳の時此六句の告勅を受け、遂に二十八歳臘月晦日再び告命を蒙り、翌年正月より六角堂に參籠したまひ、一日聖覺法印に四條橋上に遇ひ、其勸めにより法然上人の吉水の禪房を尋ねたまひたのである。而して選擇本願念佛を聞きたまひし時、信樂開發したまひたのである。故に聖德太子の日域大乘相應地といふは、即ち誓願一佛衆のことであるといふのが、行卷一乘海の釋に勝鬘經を以て釋したまひし所以である。是は私は深く信する所である。隨て命終速入清淨土、善信善信眞菩薩とあるが大に意味の存する所である。

愚禿鈔に

信受本願 前念命終 即入正定聚之數文

即得往生後念即生 即時入必定文

他力金剛心也應知 又名必定菩薩也文

便同彌勒勤菩薩 自力金剛心也應知

善導の前念命終、後念即生を信心の一念にて申さるゝには、必ず深き譯のなくてはならぬことである。是告勅の命終速入

清淨土の實現せられた時である。命終は言ふまでもなく本願を信受するは前念命終である。速入は即得往生は後念即生である。此點は亦恰も淨土論の觀佛本願力、遇無空過者、能令速滿足、功德大寶海と同様である。即ち觀佛本願力は本願を信受する命終である。能令速滿足は速入である。第二の告命に滿足とあるが、亦速滿足と同様である。淨土論の長行には速得成就阿耨多羅三藐三菩提とある。其速なることを證するために論註の終に、他利利他の深義を顯はして、十八願十一願二十二願の三願を的證して、速なる所以は本願力なることを示されてある。是教行信證の骨子なるものである。其論註に引續きて一乘海の釋があらはれてある。先づ勝鬘經とは言はずして其文を以て誓願一佛乘を示し、次に涅槃經を引き一道清淨涅槃佛性を示し、次に華嚴を引き文殊法常爾、法王唯一法、一切無碍人一道出生死と示してある。而して之を結びて曰く、爾者此等覺悟皆以安養淨刹之大利佛願難思之至德也と斷定してある。私かに考ふるに勝鬘經の文を以て自釋せられたる誓願一佛乘は第十八願に當る。涅槃經を以て示されたるは證卷の必至滅度で十一願に當り、華嚴經を以て示されたるは普賢の德にして、還相回向、二十二願に當る。夫故安

養淨刹の大利、佛願難思の至徳と言はれたる所以である。而して私かに考ふるに此告命が三度繰返されたるが恰も自然に此三願及勝鬘涅槃華嚴の三經に當る心地がある。勝鬘經は誓願一佛乘である。涅槃は能令速滿足である。又命終速入清淨土であり、正信偈て言へば速入寂靜無爲樂である。華嚴は一生之間能莊嚴である。蘭林遊戲地門である、又我三尊化塵沙界に照應することになる。そこで眼光を鋭敏にすれば一々の文字に皆意味が出来て来る。清淨土は、大願清淨報土不三品位階次、一念須臾頃速疾超證無上正眞道故曰橫超也、である、眞菩薩は眞の佛弟子である、必定の菩薩である、眞言對僞對假也である。觀音勢至常隨影護である。此の如く味ひ來れば教行信證、往相還相の回向は聖人の實驗にして、佛願自身に成就されたるものにして、一代佛教も畢竟此大利至徳に過ぎざるものである。而して十一願も廿二願も畢竟第十八願に收る如く、第二第三の告命は第一の告勅の中に包含されてある。かくの如く往還回向を以て出來上りたる親鸞聖人の眞宗は、畢竟聖徳太子の靈告によりて佛教の眞髓を示されたる宗旨である。聖徳太子和讃に曰く

聖徳皇のあはれみて、

佛智不思議の誓願に、

すゝめいれしめたまひてぞ、

住正定聚の身となれる。

他力の信をえんひとは、

佛恩報ぜんためにとて、

如來二種の廻向を、

十方にひとしくひろむべし。

聖徳皇のおあはれみに、

護持養育たえずして、

如來二種の廻向に、

すゝめいれしめたまひます。

此の如く如來二種の廻向といふことは、殊に聖徳太子と深き關係あるは言ふまでもない。而して第三の告命によりて形作られたる聖人の家庭は、還相廻向の實現である。即ち一生之間能莊嚴。臨終引導生極樂は、略文類に所謂經言、彼國菩薩皆當究竟一生補處。除其本願爲衆生故以弘誓功德而自莊嚴普欲度脱一切衆生。聖言明知大慈大悲弘誓、廣大難思利益、乃入煩惱稠林。開導諸有、則遵普賢之德。悲引群生である。是實に聖徳皇太子の家庭の再現である。磯長廟中

二十句の偈に、

大慈大悲本誓願

慈念衆生如一子

是故方便從西方

誕生片州興正法

我身救世觀世音

定慧契女大勢至

生育我身大悲母

西方教主彌陀尊

眞實眞如本一體

一體現三同一身

日域化緣今已盡

還歸西方我淨土

爲度末世諸衆生

父母所生血肉身

遺留勝地此廟囑

三尊一廟三尊位

過去七佛法輪處

大乘相應功德地

一度參詣離惡趣  
決定住生極樂界

とある。是れ即ち第一の告勅に我三尊化塵沙界といふ所以である。而して親鸞聖人の聖徳太子奉讃奥書に此二十句偈を書寫したまひ、今猶其眞蹟の断片が加賀國専光寺に保存されてある。以て聖徳太子と聖人との關係を知るべきである。此の如く鑽仰し奉れば、聖徳太子の大乗佛法の眞髓が宗旨となりてあらはれたが即眞宗である。眞の智識といひ、眞の佛弟子といひ、眞菩薩といひ、眞教といひ、眞心といひ、眞證といひ、眞佛といひ、眞土といふ、是即眞中之眞たる、念佛成佛は眞宗である。恰も是れ太子の御遺言たる世間虚假、惟佛是眞と符節を合せたるが如くである。愚禿鈔に曰く、本願一乘頓極頓速圓融圓滿之教者、絶對不二之教、一實眞如之道也、應知專中之專、頓中之頓、眞中之眞、圓中之圓、一乘一實大誓願海とある。此已上は言ふべき言がない、實に不可思議である。

次に憲法の文に人鮮尤惡能教從之、其不歸三寶何以直枉とあるは實に佛教の眞精神である。釋尊一代の説法は結局罪惡の衆生を救濟するが正意である。是佛涅槃

が何であるかが分からね。眞如々々と叫べども單に哲學的本體として眺めて居る。夫故單に冷々たる一頑石の如き眞如を説きたりとして何が大乘である。抑々此誤謬の來る所以を考ふるに、單に近代哲學の影響のみならず、遠く徳川時代の研究佛法講説佛法にのみ陥りて、實験信仰する力の缺損したる結果、遂に大乘の大乘たる點、眞如一實の絶對なる點を味ふとがなくなりたるのである。抑々此問題は遠く佛教歴史に於けるに、佛初めより小乗を説きたまひしことではないのである。苦空無常無我を説きたまひし時、既に他の一面には涅槃寂靜の境を説きて、絶對の妙諦に導きたまひたのである。これ四諦の滅諦である。灰身滅智の涅槃などを佛が説きたまひし筈がない。若し之を説きたまひしならば、所謂世上の物質論者の斷見と何ぞ撰ばん。今日の佛教者若くは哲學者の考へつゝある原始佛教は、畢竟斷見外道である。故に之に對して起りたる大乘佛教なるものは、眞如といふ本體實在を説く所の一元論者の如き常見に過ぎることになる。傷ましき哉現時の學者、小乘大乘を以て斷常二見の外道と混同することや。或物は斷見的涅槃を以て原始佛教と考へて、佛の眞意なりとして大乘非佛説を説き、或者は常見的眞如を唱へて發達佛教の極意なり

に臨みて阿闍世を救はれたる所以である。而して聖徳太子は其眞精神を發揮して守屋を折伏し、馬子を攝受して世を救濟されたるものである。而して是れ恰も罪惡深重煩惱熾盛の衆生を救濟する選擇本願の眞意にして、恰も親鸞聖人の所謂善人なほもて往生をとぐ況んや惡人をやの眞精神である。此の如く前聖後聖其揆一にして無限大悲の如來に調伏せられて信樂開發するか、篤敬三寶の窮極である。此眞諦第一義の信仰が確立すれば一生之間能莊嚴の徳が自然に家庭のみならず、政治に、社會に、國家に、百般の人生に實現するものが世諦人生の光明である。是れ次の各條にあらはるゝ所である。

此際猶附言せんと欲する所は、上來の如く親鸞聖人が聖徳太子より受けられたる神秘的靈告により辨じたるが爲に、或は眞宗の大乘の大乘たる眞味を了解し難き處ある故に、大小乗の問題につき一言辨ぜねばならぬのである。全體大小乗の問題は佛教研究上の大問題である。併近來之を研究するものが皆哲學上の問題として、實験上の問題であることを知らぬものゆへに其効がない。抑々大乘と小乗との區別は眞如を説くと説かざるの別であるといふ。如何にも眞如を説くと説かざるとは大小乗區別の標幟と見るもよい。されど眞如其物として、理論の深密なるを誇る。何ぞ知らず、佛教は此の如き空想戲論にあらざることを。抑々佛陀苦空無常無我を説きたまふや、是れ滅度涅槃の妙境に通達したまひし眞諦實相の第一義に外ならぬ。しかるに之を律法的、厭世的、遁世的に理解、實修したるが爲に、此に遂に結果として小乘佛教を生じたるのである。佛固より國家を超絶し、家庭を出家し、世間を解脱したまふ。故に國家を救ひ、家庭を救ひ、世間を救ひたまふ。而して律法的佛教者は前半の出世間的なるを見て後半の光明の發揮せるを知らず、苦空無常無我を觀せんことを勉めて、遂に消極的なる涅槃即灰身滅智を目的とするに至る。此に至りて涅槃の眞意を去る萬里である。此律法的涅槃を覆へして、佛説涅槃の眞相を説き、涅槃は此の如き消極厭世の境に非ず、常樂我淨の徳を具へたる妙境である。固より世間の有様は無常である、苦である、空である、無我である。其無常が無常であると分かつた時は、涅槃常住の境に立つて始めて世の無常を知るのである。單に無常である、無常である、と泣き悲みつゝあるのは、固より佛の説きたまひし無常の說法にあらず。世間は無常である、虚假であると分かつたは、眞實の涅槃の境が輝き來りて之に安住するからである。此常

樂我淨の徳の圓滿せる眞實境が眞如一實の境である。無上涅槃、法身常住の一如である。是如來の來生したまふ所、又我等の往生せんとする所、此如來の放ちたまふ光明は我等をして觸光柔軟ならしめ、此本覺より無明の大夜をあらはれみ現はれたまふ如來の大慈大悲の願心は、一切衆生を引攝したまふ正覺を成じて、御名を十方に聞こえしめたまふ。さればこそ、親鸞聖人は大行を以て極速圓滿眞如一實の功德寶海といひ、信を以て極速圓滿之白道、眞如一實之信海と申されてある。是皆能令速満足功德大寶海の實現である。聖人十九歳已後十年間無常に泣きたまひし命終速入清淨土の問題は、此に解決せしに非らずや。是信の一を以て解決せしに非ずや。大信心者則是長生不死之神方、忻淨厭穢之妙術といふ言は、當時聖人の實驗に非ずや。而も是れ曇鸞大師の實驗と符合するに非ずや。善信の名も親鸞の名も皆是より來るに非ずや。此の如く眞如一實の功德眞如一實の信海を得たる眞の佛弟子、眞菩薩は、大願清淨の報土に生るべき身とせられたのである。其報土が即ち極樂無爲涅槃界である。眞如法性身を證するのてである。聖人が力を入れて眞實證と申さるゝのが是である。是特に眞佛眞土を示さるゝ迄である。彌陀の妙果を號して無

上涅槃と曰ふと云ひ、起信論を引きて得入とは眞如三昧也況乎無念之位在於妙覺といふのが是である。馬鳴の大乗起信も畢竟是である。龍樹の大乗無上の法も畢竟念佛である。歡喜地は信心歡喜である。是が必定の菩薩である。即現生に不退轉地の菩薩に入り、極惡深重の衆生大慶喜心を得て、諸の聖尊の重愛を獲るのである。是龍樹の大乗である。觀佛本願力、遇無空過者、能令速満足、功德大寶海、是世親の大乗である。而して此人生上に盡十方無碍光を仰ぎ、一切の世間悉く大悲恩龍の攝取光中に照護せられ、普賢大士の徳に引導せらるゝもの、是現生に大乗の眞髓を得たる人生である。此に於てや、國家、社會、家庭、政治に、實業に、教育に、如來の光明眞諦第一義の活躍せざることなきに至りたるのである。是常樂我淨の徳を實現する無上涅槃の面影を既に此人生に現するものである。是聖徳太子が日域大乗相應地と申されたる所、親鸞聖人が第一義乘誓願一佛乘と申されたる所、而して二十世紀の全世界に將來實現せらるべき大乗中の大乗、眞宗中の眞宗たるべき佛教の眞面目である。事少しく重複に渉るも大乘の意味を實驗的に味ふたるものである。

時 報

菅瀬令夫人を吊す

我無二の親友菅瀬たゞ子の君は十一日午前二時廿三歳を一期として往生の素懷を遂げ給ひぬ。はからざりき、かゝる若き健なりし我友が忽ち無常の風に誘はれて、朝の紅顔、夕の白骨のありさまを我に示し給はんとは。嗚呼我が姉とたのみ終世の伴侶と信頼せる君に引れ奉る。何の悲かこれにすぎん。

君は幼時父母に別れ給ひしをもて宗教を求むる心いと深かりき。數年前同和學園主菅瀬芳英師に嫁し給ひ、共に學園の爲め全力を捧げ、よく糟糠の妻として師を助けたまひき。君年いまだ若きによく艱難に處し給ひ、艱難に堪へて益々求道の念切なりき。君は日々學園の爲め炊事の勞をとりたまひ、多忙にて暇なきを欠き日曜毎に我求道學舎へ來聽せられき。われ永く君の夫人なるを知らず過ぎしに一夜信心のよろこび抑へがたく共に語りたければとて我を訪ひたまひぬ。過ぎし迷の跡歎の思ひ、残る方なく語りたまひて快活なる笑をもらしつゝ君は身の幸を喜びたまひき。此時われは信仰ある友なかりしかば、全く佛の我にたまはりし善友と君を信じ、嬉しき例へん方なかりき。以後信仰を互に語りあひ、苦しき時歎はしき時、まづ君に是を訴へ君に是を分つを常としき。君の心中は常に信仰より他になく、樂しみは法をきくにまさるもの

なかりき。されば君にあへば實に力つよく頼もしくて我のまぢらくる以上に深く同情し、己れを捨て、人の善事を喜び給ふ麗はしき飾り氣なき性なりき。先年菅瀬師の母上病にかゝり給ひし時君は單身故國にかへり給ひ殆ど一ヶ年病床に侍りて滿腔の熱誠もて看護をつくし給ひぬ。遂に母上失せ給ひし後もよく寺の跡を治めてかへり給ひしが歸途神戸なる福間末亡人を訪ひ、數日を過して懇に夫人を慰さめ給ひき、歸京後始めて求道學舎の講話に來聽せられし時、我は君の前にありて此座に君のあり給ふ様の感頻りに起りしかば終るや直ちに後をかへりみしに君にこやかに座し給へり。此時君は一年にあまる信仰の經過を語らんとし、我は君の母上の爲御寺の爲盡したまひし御苦勞を感謝し慰さめんとして、思の半をも語るを得ざりき。君は信仰の力によりわれらの堪ふべからざるを堪へたまひしの人なり。

されど君はかく信仰を歡ひ給ひしもいさゝかも得たる如きけしきなく、常に人に向ひてまづおのが歡びをつけて、いかならんかを問ひ給ふを常としぬ。又おのが惡しかりし事などを宣ふにも少しの餘地をあまさず懺悔したまひ、人に對しても常に信仰をすゝめ、病苦厳しき時にすら苦しき思の下より、傍の人に宗教心のなきを戒め給ひしとかや。君は何れの方より眺むるも信仰ある婦人の好摸範といはざる可らず。古より法の爲に犠牲となれる人多し。君亦些も顯はれず隠れて法の爲めによく盡したりといふべし。君は嫁して數年子なかりしかば人々御子のおはさん事を祈り居たりしに、先頃身重におはすよしをきゝ大に一同喜びあへりき。然るに人生無常遂に其

善事かへりて仇となり、思ひもふけぬ死にあひ給ひぬ。歎にかふる悲しみ、痛歎いふところをしらず。されど又静に君の信仰をおもひ、先頃稲田聖人の御舊蹟に参詣したまひ、聖人覺信尼公の御傳道のあとを忍び。此上なく喜ばれし事などおもひめぐらすに、君亦其蹟を慕ひて稲田太古山の御墓へ静に還歸したまひしか。嗚呼。

君の一生はいと短か、りしがよく信仰を歎び、法の爲に全身を捧げたまひし麗はしき生涯なり。今は有漏の穢身をすて、法性の常樂をえ、思ふが如く君が良人を助け、迷へるわれら有縁の者を導き給ふべし。葬儀は十二日午後四時、君が真心をもて働き給ひし同和學園にて驟雨激しき時しめやかに營まれぬ。同和學園君いままさずして寂寞の氣満てり。嗚呼悲哉。

感謝

前後八十日の夏季傳道を終り、九月十四日朝予は無事に求道學舎に歸着しぬ。久しぶりにて學舎佛前に詣て、勤行を爲し、感謝の誠を捧げぬ。回顧すれば六月二十八日より五日間東の方若松講習會を終り名古屋に三日東條を経て美濃高須及其近傍に一週間講習會を終りて一旦歸京し、三日間大日本佛教青年會の講習會に出席し、七月二十日再び出立、伏見に立寄り、讃岐高松及其近傍を終りて、安藝の竹原、吳を経て、八月一日より五日間經て福岡大學の講習會に出席し、爾後直方、大隈、伊方、後藤寺、行橋、中津、四日市、高瀬を経て耶馬溪に入り、柿坂、森町、日田、各地に法を説きつゝ天下

の絶景を賞し、十六日吉井町講話中、郷里地震の警報に接し、別に臨み久留米一席の講話を爲して出立す。唯昨年已來待ち兼ねたまへる木屋久磨師に約を踐むあたはざりしは遺憾に堪えざる也。十八日歸郷、罹災の同胞を慰藉し、二十日岐阜講習會より、彦根、東圓堂、日野を終り、家門に入るの暇なく、直に越前金津及津幡に立寄りて二十七日より六日間、能登宇出津講習會に出席す。終りて九月一日より七尾及徳田を經て越中福野、頼成及中田に三日間。多年待ちたまへる法縁純熟し、富山、東岩瀬を經て、魚津、生地に至り、五日より九日まで泊町講習會に出て、其間剗山、飯野、青木、新屋にも出演し、十一十二の兩日直江津の御同朋と會ひて歸京す。處を易ふること凡五十箇所、席を重ねること三百餘回。到る處渾き御同朋の友愛と厚情とを辱ふし恰も慈悲光裡に翔翔し、智慧海中に游泳し、八旬の久しき恰も旬日の感たらしむるもの、皆是大悲回向の恵たらざるはなし。殊に本年は不思議にも、期せずして聖蹟を踐むことの多かりしは恩寵感極る所也。若松より歸路一家相率ゐて稲田の草庵及太古山の覺信尼公の廟に詣て、四國に法然上人の聖蹟に詣て、越中より越後に移るや親不知の難所を徒歩して外波大雲寺に詣て、糸魚川にて乗船して直江津に上陸し、而も聖人が居多濱に着したまひし時宿りたまへる居多氏の家に宿したる、皆是聖人の恩徳感謝するに辭なし。猶三たび國府に於ける聖人謫居の舊蹟を拜するを得たる、皆是大悲引接の御恵たらざるはなし。殊に本年は越中に於て一善親友より求道會館の爲とて祖師聖人の眞筆六字名號を賜はりたり。感泣極なし。乃ち其出所を

探らんとて越信の國境關川村を訪ふ。是聖人が戸隱山への通路にして老松十圍空を凌ぐ。是聖人が袈裟を掛くる處也と。又聖人の經塚あり。其側の農家、嘗て六字名號を藏せしの家、予訪ふて又黝黒なる九字名號を賜はりたり。大悲冥々の天授眞に不可思議の極也。他日詳記する所あるべし。最後に吾人が驚愕措くあたはざるは火宅無常の警戒頻々として層々重り來ることなり。寔に西川兄を吊して夏期傳道の途に上りたりしが茲に記せるが如く到る處愁嘆の聲を聞き、遂に郷里の震災あり。萩野兄の兒を失ふあり。而して歸京前三日菅瀬夫人奄として逝く。夫人は淑德厚信の人、敬虔なる態度を以つて聽講したまへるの狀宛として觀るが如し。而して今や初秋開講の月遂に再び見ゆる能はざる歟。菅瀬師の胸中察するに堪へたり。嗚呼。鳥邊山昨日も今日も立つ烟ながめて通る人は何時まで、噫是れ我等に對する大悲矜哀の善巧たらざるはなし。今や正に正覺華中の人として穢土の我等を照觀して哀愍悲憫したまふらむ。南無阿彌陀佛。

行 誠 上 人

三十あまりみつの浦舟なみたちてさす棹いかに際なからむ。  
ひく糸のしばしばかりのゆるびより思ひ揚れるいかのほり哉。  
はてもなく思ひあがりし心よりあそいと迄の名はおいにけむ。  
袖われし水際のなみも音かへてほのほばかりぞもえ渡るかな。  
父といふ名をだにしらぬ露虫の身の果いかにならむとすらむ。

告

本誌本號疾く發行可致きの處係の者八月初より病臥候爲め編輯間に合はず非常の遅延申譯なく候。尙ほ昨年第六號より每號一ヶ月の延刊と相成り居り候處、今回の機會を以て發行日を毎月十五日に變更致し、本月十五日を以て第八號發行の事に相改め申候、爾後は毎月必ず發行日を遵守可仕候間左様御諒承願上候也。

四十二年九月

求道發行所





「禪」記者 岡田宜法師著述

# 最新刊 禪學綱要

本書は別れて上中下の三篇となつて居る上篇は禪宗の歴史で先づ印度の古代から筆を起して支那に入り達磨以前の禪風より着々進みて最近世の禪風を叙述し更に日本に移りて鎌倉以前より明治の近代に至るまで少しも漏さず或は評論し或は憤慨し趣味津津たるべく進んで禪宗の五家七宗の段となり此より中篇の部に入り且つ明瞭に叙述し下篇に入りて禪の教更に及五家七宗の意義より坐禪の目的理想を定め悟の意義を説くも禪の宇宙論、心理學上より考察し終に南北禪の批評に出で更に細に入りて悟の意識を究明し禪の催眠術の異同を一一指示し禪の宇宙論、人生論、死生論、解脱論、佛性論、懺悔論、懺悔論、因果論、倫理論を組織し身心脱落の理より修證不二、本證妙修の祖師西來意、生死即涅槃、宗說行一致、迷悟不二、本來の面目、本來無一物、本地の風光、淨土と彌陀、五官と見佛、信仰と學道、自然と自我、以心傳心、君臣五位、四料簡等無限に禪を解釋し一轉して比較、干鑿、批評の論に移り茲に老子、莊子、列子、自然と自我、以心傳心、君臣五位、四料簡等無限に禪を文學、神通力、自力と他力、唯物論と唯心論等如何に禪と關係あるかを、陽明等の哲學と比較論評茶道、生花、武士道、美術、最も明瞭に通俗的に述べ思想統一者として禪を卓立せしめ過去の禪風と將來の禪風とを以て巻を結ぶされど小學兒童にも讀み易からしめんとしたる著者の苦心は察するに難くはない

菊版洋裝 全一册  
厚紙舶來上質洋紙摺  
正價金七拾五錢 郵稅八錢

近角常觀校訂

## 冠頭 歎異鈔

定價五錢 郵稅四冊迄貳錢 施本用小冊子

第三部 數ニ應  
引シ充分割

此の「歎異鈔」は聖人の遺教を世に普ねからしめんが爲め、施本用小冊子として出版せるものにて、讀み易きやう字をまばらに植ゑ、校正を嚴密になし、且つ冠頭を加へて諸聖教中より參照すべき文を引用し、親切に作りたるものなり。教家諸君の御一顧を俟つ。

近角常觀著

## 信仰之餘瀝要畧

定價五錢、郵稅四冊迄貳錢、施本用小冊子

初部 數ニ應  
引シ充分割

本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に「信仰之餘瀝」中の眼目「宗教的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を抜萃し、傳道用小冊子として印刷したるものなり。有志諸君の御試用を切望す。

### 新刊廣告

近角常觀校訂

# 冠頭 唯唯信鈔文意鈔

全一册 九月下旬 發行豫定

定價一册七錢 郵稅三冊迄貳錢

部數に應じ充分割引す。

右唯信鈔は親鸞聖人の法契聖覺法印の述作にして、唯信鈔文意は本書を弘く世に行はしめんが爲め、聖人特に文意を著して、愚癡無智の輩に授け給へるものとす。聖人に文意の著あるに見ても唯信鈔の他力信仰上必須の聖典たるは知る事を得べし。「歎異鈔」を初めとして聖人一代の化導、多く此書に淵源すと言ふも過言に非るなり。爾るに世久しく此の聖典を忘る。茲に本所感ずる所ありて、此の兩書を一冊にまとめて對稱拜讀に便ならしめて刊行す。校正を嚴密にし、冠頭を加へて參照用文を引用したる等凡て歎異鈔に同じ。同胞諸君には是非に一讀を冀ふ。

發行所 東京市本郷區森川町一番地 振替口座東京一六六九六番 求道發行所

### 規定

本誌は毎月一回一日發行とす  
本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず  
本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、但し其節には登記料金貳錢必ず御加算を請ふ  
郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事  
郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事  
凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし  
本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事  
回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事  
本誌定價左の如し

部一ヶ月	六ヶ月	一年	郵税一册
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢
●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢			に付五厘

明治四十二年 九月十五日印刷  
明治四十二年 九月十五日發行

發行所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所  
(振替口座東京一六六九六番)

大賣捌所 東京市神田區表神保町 東 京 堂



前號要目

求道

◎是非しらず邪正もわかぬこの身なり

自序

◎清澤先生及其信念

講話

◎四海兄弟

聖傳

◎チャリタカ釋尊傳

第廿七 豚を嫉みし牡牛の話

近角常觀

第廿八 獸に慈悲あれ

告白

◎善巧方便奇なる哉

山崎震雷

講議

◎歎異鈔

近角常觀

第拾二章大切の證文につきて

時報

◎西川唯信居士追悼會◎夏期傳道概況◎爾後の傳道

日割